506
226

始

506-226

帝國圖書館藏

子供さんのお芝居

全十二編

葉多默太郎作
裝禎及挿画 字崎純一

大正
11. 9. 1
内交

はしがき

今迄の對話と云ふものより、も少しお芝居らしいものを作つて見たいと思ひました。

そして　色々出來上りましたものゝ中から、よさそうなのを十二編だけ選んで、一冊の本に纒めました。

大分に在來のものと色合が違つたのがありますが、皆さんが讀んで下されば、著者がどんなものを、お勸めしたいと思つてゐるか、御分りになることでありませふ。

夕べの祈り

いゝと思はれましたら、お友達にも御勧め下さい、一人でも餘計の方に讀まれて、彼方此方で面白いお芝居が始まれば、著者はどんなに嬉しいことでしやう。

大正十一年
若葉の頃

著者識す

目次

幼年お伽　ぐずぐず國……（一）
動物劇　桃太郎さんの家來……（一一）
少女喜劇　お姫様……（二七）
教訓喜劇　にせ地藏……（四一）
喜歌劇　平和……（六三）
少年劇　友達……（八一）
少女劇　サンター、クロース……（九七）
哀話　巡禮唄……（一一九）
琵琶劇　石童丸……（一三七）
正劇　夕の祈……（一四九）
情緒劇　父歸る……（一六五）
お伽劇　魔法鏡……（一七九）

（附　錄）

上演に就いて……

※人數のこと……（二〇三）
※舞臺のこと……（二〇五）
※扮裝のこと……（二〇七）
※歌曲のこと……（二〇九）
※臺詞の覺え方……（二一〇）
※振りと云ふこと……（二一三）
※大切なこと……（二一五）

幼年お伽

ぐづく國

二場

登場人物

ぐづく國の王様
太郎さん
子供 二郎
同 三郎
同 四郎
同 五郎
同 六郎

（王様だけは大きい方がよろしく、子供は男子でも女子でも、又は混合でもよろしい）

第一場

（舞臺）お庭、中村に何で造つてもいゝが、庭石らしいものを置きます、

奏樂の中に幕が開きますと、太郎さんが其石に腰かけて、御本を讀んでゐます、

太郎（本を讀む）『えーと、昔し昔し遠い遠い所に、ぐづ〳〵國と云ふ國がありましたゝ、其處には赤い大きな王樣がゐて、――面白いぞ、面白いぞ』

（其時奥の方からお母さんの聲が聞こえて來ます「太郎や、太郎や」）

太郎『分つてゐるよ、今御本を讀んでゐるのですもの、分つてるよ』

（又母さんの聲がします「御飯だよ」）

太郎『分つてゐるよ』

（と云つて、やつぱり本を讀んでゐます、その中に眠くなつて、そろ〳〵と居眠りをし出し、とうく石からすべり落ち、其石に背をもたせたまゝ、ぐつたりと眠つて仕舞ひます。そして電燈ぐすぐす國

が消えて、暗くなります。）

第二場

（舞臺）ぐづ〳〵國の教室です、
電燈が明るくなると、此の教室で、子供が皆手に讀本を持つて悲しそうに俯向いて立つてゐます、
其處へ太郎がきよろ〳〵と不思議そうな顔をして入つて來ます。

太郎『おや、君此處は何處だい？』

二郎『此處はぐづ〳〵國だよ』

太郎『ぐづ〳〵國ッたら何んだい？』

三郎『誰でもぐづ〳〵する子供は皆此處へ連れて來られるのだよ』

四郎『そして其罰に毎日〳〵痛らい課業があるのだよ』

五郎『今に王樣が來て課業が始まるから見てゐ給へ』

六郎『そら王樣の足音がする』

（どし〳〵と足音させて、大きな恐ろしい顔の王樣が登場）

王樣（恐ろしい聲で）『こら、何を喋つてゐるのか、（太郎を見て）こらお前は何んだつて、そんな所に立つてゐるのだ、』

太郎『だつて僕』（と顔を上げる）

王樣『おやお前は新入生だな、よし〳〵入學しろ、名は何と云ふのか』

太郎『僕太郎つて云ふの』

王樣『そうか、でお母さんがお呼びになつたら、いつも何と云ふのだ』

太郎『僕、僕直に「はい」つて答へて行くよ』

王樣『嘘をつけ、そんない〻子は此處へ來る筈はない、どれ〳〵顔をよくお見せ

――成程ちやんと書いて有る、お前は何時も「分つてるよ」と云ふのだらう』

（太郎は驚いて、手で顔をなでる）

王様『はゝゝゝ、そんなにしたつて消えるものか、では一番しまひへ並べ』

（と押されて、太郎は六郎の次に並ぶ）

王様『氣を付け（皆きちんとする、王様は二郎の前に行き）お前は何だつたかね、おゝそう〳〵「一寸待つて」だつた、今日は一億遍讀め、一寸讀んで見ろ』

二郎（讀本を上げて開き）『一寸待つて、一寸待つて〳〵〳〵』

王様『よし、それから三郎、お前は何だつたかね』

三郎（同じ樣に本を上げて）『今直ぐに、今直ぐに〳〵〳〵』

王様『よし、今日中に五千萬遍讀むのだぞ、（四郎の前に行き）お前は何だつたね――

そう〳〵「いやだよ」だつたね、』

四郎（本を上げて）『いやだよ、いやだよ〳〵〳〵』

王様『よし、四郎は今日は七千萬遍だ、（五郎の前に行き）五郎お前は新入生の太郎と同じく、「分つてゐるよ」だつたね、千萬遍でいゝ（六郎に）六郎お前は何だつたかね』

六郎（本を上げて）『知らないよ、知らないよ〳〵〳〵』

王様『よし、それを千萬遍讀め、（太郎の前に行き）太郎、お前は今日始めてだから五百萬遍に負けてやる、さあ―此本を（と云つて讀本を渡し）見て讀むのだ』

太郎『勘忍して下さい、王様勘忍して下さい、僕何も知らないのだもの』

王様『いけない、何時でもお前が云つてゐる、一番好きな事ではないか、云つて見ろ』

太郎（恐ほそうに）『分つてるよ、分つてるよ〳〵』

王樣『そうだ、そう云ふ調子に、五百萬遍讀めば今日は課業が濟むのだ、いゝか さー皆始め』

（子供一同めい〳〵の言葉を早口に讀み出す、『一寸待つて〳〵』『今直ぐに〳〵』『いやだよ〳〵』『分つるてよ〳〵』『知らないよ〳〵』等云ふ聲が一緒になつて、八ケ間敷い。其中に二郎が、口がだるくなつて、一寸休むと王樣は二郎を睨み付けて、手の鞭を振り上げるから、二郎は又讀みかける、子供の誰彼が一寸休むと、直ぐに王樣は鞭を振り上げて睨むそこでしかたなしに、皆讀んでゐる。

太郎がとう〳〵疲れて仕舞つて、手を下ろし默つて仕舞ふ）

王樣（太郎の前に行き）『こら何故手を下ろすか、早く讀め』

太郎（悲しそうに）『だつて僕もう口が惰るくて讀めないのだもの』

王樣『お前の罰だから致方が無い、讀まないと、是だぞ』

太郎『だつて、僕』

王樣『これッ』

（と鞭を振り上げると同時に電燈が消えて、暗くなる）

次に明るくなると、元の庭で太郎は前の通り本を持つたまゝ、石にもたれて寢てゐる、そして急に『あッ御免御免』と叫んで眼を開ける。

太郎（あたりを見廻はし）『おや此れは不思議だ、內のお庭だ、王樣もゐないし、子供もゐない、あー夢だつたのだな、だけど恐はかつたなー』

（と獨言してゐると、奥から『太郎や、太郎や早くお出でよ』と云ふお母さんの聲がする）

太郎『分つてゐるよ（と云つて、自分に驚き、口に手を當てゝ一寸見廻はし、直ぐに云ひ直ほす）

はーい、お母樣』

と答へ、立つて走り込む、そして奏樂の中に太郎始め子供皆々出て來て並び、正面に向つて、お客樣に丁寧に御辭儀をして、

——幕——

（附記）王樣はなるたけ恐はい顏をして欲しい、鬼の面を着けてもいゝと思ひます。

動物劇

桃太郎さんの家來

一場

登場人物	役名
桃太郎	桃太郎
犬	ワン吉
雉	クロ助
猿	エン公

（舞臺）　野原

初め賑かな曲で、次の歌を合唱する。

合唱　世界に名高い　桃太郎が
鬼が島へと　征め寄せて
どんちやんぱらりと　切りむすび
目出度く大將　生け取つた
色どり〳〵の　寶もの
車に積んで　凱旋を
いたした時の　お供さん
犬猿雉の　三匹が
ここに集まり　名々の

桃太郎さんの家來

手柄話しに　花咲かす
おもしろいやら　おかしいやら
そのめい〳〵の　言ひ草を
さーさ皆さん　聞き給へ、
さーさ皆さん　聞き給へ。

と終つて同時に幕開く、と犬猿雉の三人が鬼んでゐる。

犬『ワン〳〵　切角此うやつて三人が――いやなに三匹が寄つて遊ぶと云ふのだが、何か面白い事でもないかね』

猿『キャツ　キャツ、そうだね、樹に登りッこをしやうか』

雉『コン〳〵　空を飛びッこをしやうか』

犬『駈ッこをしやうか』

三人『はゝゝゝゝ』

猿『各々勝手のいゝ事ばかり云ふね』

雉『何かないかね、外に面白い事は』

犬『うん　一層昔し話でもしやうか』

猿『そうだね、昔を思へば實に愉快だつたね、色々な事が有ッたッけ』

雉『中にも鬼ヶ島の征伐さ』

犬『それ〳〵、あの時は面白かつたねー、先づ俺が一番槍の功名手柄』

猿『待て〳〵、一番に門を這入つたのは俺だつたぜ、先づ僕か抜群の功を立てたね』

雉『そう偉張りなさるな、その門を開けたのは誰だつたいな、第一番に敵陣に飛び込んで、僕が開門したればこそ、君達が入れたのだよ、何と云つても僕

が一番の手柄をしたわけさ』

犬『おや〳〵クロ助に、エン公、いやに偉張るね、そんな事を云つたつて、駄目だよ、太郎さんだつて花子さんだつて、世界中の子供さんはちやんと知つてゐる、俺が一番偉い證據がある』

猿『證據つて？、それは妙しい聞こう』

雉『何んだね、ワン吉さん』

犬『知らなきあー云つてやるさ、エヘン、何處の坊ちやんでも嬢ちやんでもだれ犬猿雉と此う並べて云ふだらう、猿雉犬つてなんぞ云やしないね、それで見ても俺が一番だ、偉いから一番に附いてゐるのだよ』

猿『うんワン吉君は中々うまい事を云ふね、だが僕はそう思はないよ』

犬『何故だい』

猿『何故ッて行列を見るがいゝ、一番先は先拂ひと云ッて家來が行くよ、そして眞中が先づ大將だね、それから尻尾がお供だ、そうだらう、だから眞中の僕が一番偉いんだね、世の中の人はよく知ッてるよ、だからちやんと僕を眞中に入れて云ふのだ』

雉『私はそうは思はないよ』

猿『何故だい？』

雉『何故ッて演說會でも琵琶歌の會でも、見給へ、初めはへぼが出て皆に退屈をさせるが、順々と上手なのが出て、一番終りには先生が出るよ、世の中の子供はよく知ッてゐるよ、私が一番手柄が有ると思ふから一番終りに並べたんだね』

犬『おや〳〵』

桃太郎さんの家來

猿『おや〳〵驚いた』

犬　獨唱〜それでもやつぱり
俺樣が偉い
知らなきや云つて
聞かそうか

猿雉合唱〜どうしたと——

犬　獨唱〜舟に乘つては梶をとり
島に着いては一番がけよ
ワン〳〵〳〵と吠え立てゝ
鬼のどぎもを踏み潰し
慌てる敵をしやじむじに

踏み立て蹴倒し切りまくり
六ツも七ツも鬼の首
ひツこぬいたは俺様だ。

猿　獨唱　そんな事では
へこまない。

犬雉合唱　どうしたと——

猿　獨唱　長いお槍を引さげて
きやツ〳〵〳〵と躍り込み
突き立て刺し立て、追立てて
御殿間近く迫め入つた、
桃太郎様が危ぶしと

桃太郎さんの家來

桃太郎さんの家來

見られた其時槍をすて
鬼の大將の胸倉へ
飛付き顔中引かいた。

雉　獨唱　そりやー偉かろう
だがも少し私が偉い。

犬猿合唱　どうしたと——

雉　獨唱　何と云ふても私は飛行器
西も東も分らぬ島の
道の案内誰がした
大きな羽根を一杯擴げ
お城の上をゆう〳〵と

偵察飛行をした時は
鬼共あツと驚いて
がた〳〵と震へたよ。

犬　獨唱　そんな事かい

猿　同　こんな事かい

雉　同　どうした事だい

犬　同　いけないよ〳〵
何と云ふても
俺樣が一番

猿　同　いけないよ〳〵
何と云ふても

桃太郎さんの家來

桃太郎さんの家來

雉　同　〜〜いけないよ〜〜　僕が偉いよ。
何と云ふても
私が大將

三人合唱（疳癇を立てゝ）
〜〜本當にお前達は
分らずや——

（其時桃太郎さんが登場して、ひよつこり後ろに立つ、ふと三人はそれを見て、急に首を縮め默つて仕舞ふ）

桃太郎（にこ〜として）『お前達何を云つて爭つてゐたのだ』

三人『へい』

桃太郎『へいでは分らない』

三人『はい』

桃太郎『早く云つて見ろ』（と叱る）

犬『お恥しながら』

猿『鬼ヶ島合戰の』

雉『手柄爭ひを』

三人『いたしました』

桃太郎『一人の力では何事も出來ない、四人が一つになつて働いたから勝つたのだ、三人共俺の大事の家來だ、そんな事を云つて爭ふものでは無い。ワン吉、エン公、クロ助、分つたか』

犬『はい』

桃太郎さんの家來

猿『分りまして』

雉『御座ります』

桃太郎『よし〳〵、それでは仲よく歌でも歌はう』

（四人は手をとつて、次の歌を歌ひながら足取面白く舞臺を廻る）

犬猿雉〳〵桃太郎樣を頭とし

桃太郎〳〵後に從ふ家來共

合唱〳〵勇みに勇んで出かけたり

白地に桃の旗印

ひら〳〵〳〵と飜る

犬はワン〳〵お猿はきやつ〳〵

雉はコン〳〵空を飛ぶ

此れには流石の鬼共も

生命ばかりはお助けと

降參〳〵白旗だ。

（三人手を解き、調子合はせて手を下げ正面に向つて頭を下げる）

——幕——

（附記）犬猿雉は苦風してそれ〴〵の風をするもいゝが、出來なければ、ボール紙に名を書いて、胸につるしてもよろしい。

欠

教訓劇
喜劇

にせ地蔵

一場

登場人物

お地蔵様
少女君子
病人
乞食
近所の少女　花子
同　雪子
旅の人　甲
同　乙

欠

（舞臺）　町はづれの路端

合唱　〜町のはづれの　お地藏さん
　朝から晩まで　立つてゐる
暑い日中も　雨の夜も
　いやなお顏は　なさらない
　ほんにお地藏さんは　心棒者

町のはづれの　お地藏さん
　病人であろと　乞食であろと
どんな汚ない　兒供であろと
　いやなお顏は　なさらない

ほんにお地蔵さんは　心切者よ。

合唱の中に幕開けば、中央の壇の上に、お地蔵さんが立つてゐる。赤い前掛をして、手をお地蔵さんらしく、右を上に、左を胸の所にやつて、少しも動かずに立つてゐる、そして其兩側に色々なお菓子等の供物が供へられてある。

（其時左手から少女君子登場し、中程に來た時、ふとお地蔵さまの供物を見、羨やましそうに、お地蔵様と供物とを見較べ、正面に向く）

君子『お地蔵さまはいゝわね、あゝやつて、何もお仕事をなさらないで、あんなに御馳走を澤山貰つて、本當に羨ましいわ、妾何故お地蔵さんに生れて來なかつたのだらう』

地蔵『これ〳〵君子さん』

君子（驚いて、見廻はし）『おや！誰だらう、今あたしの名を呼んだのは――誰も

居ないのに、あゝ分つた大方氣の迷ひだわ、それにしても、まあお地蔵様はいゝわね、あたしなんか、お掃事をしたり、お使ひに行つたりしても、あの小ちやい分位のを、一つしか頂けないのに、お地蔵さまは、何もしないくせに……』

地蔵『これ〳〵君子さん』

君子『おや誰なの（と振向くと、お地蔵さんが笑つてゐる）まあ―今のはお地蔵さん、あなたなの？』

地蔵『はー、私しだよ』

君子『まあー驚いた、お地蔵さんッて物を言ふ事が出來るの？、まあー驚いた、あたし初めて知つたわ』

地蔵『今大變私しを羨ましがつてゐたね』

君子『えゝそうよ』

地藏『そんなに羨ましいの？』

君子『そりやーそうよ、だつて、何もしないくせに……』

地藏『あゝ、もういゝよ、今聞いたよ。お菓子を澤山貰へるつて云ふのだらう』

君子『そうよ、あたしなんか……』

地藏『それも聞いたよ、お使ひに行つて、だらう。そんなに羨ましいなら、代はつて上げやうか、君子さんあなたお地藏さんになつて御覽』

君子（喜び躍つて）『まあー嬉し、お地藏さんそれは本當？、あたしお地藏さまになつてゐゝの？』

地藏『あゝ、なつて御覽、そりやー面白いよ』

君子『そうだらうね、じつとしてゐて、澤山お菓子を貰つてね』

地藏『ほゝゝゝ、後でいやだと云つてはいけませぬよ』

君子『そんな事は決して無いわ』

地藏『じやー此れを掛けて、此處へ立つてお居でなさい、私は其間に一寸觀音樣の處へ、久方振りに遊びに行つて來ませう』

（と臺より降りて、前掛を君子の胸に掛けてやる。君子は嬉しそうにして、臺の上に上る）

君子（手をお地藏樣の樣にして）『これでいゝの』

地藏『はあー、それでよく似合ふよ、その代はり、動いちやー人間に見あらはされては仕舞ふよ、いゝかい』

君子『あゝ、いゝよ』

地藏『では行つて來ますから、留守番を頼みますよ』

（と左手へ退場）

君子（後見送つて）『まあー嬉しい事、妾遂々お地藏さんになつてやつた、色々な面白い事が有るに違いないわ（ふと供物を見て）まあーおいしいそうなお菓子だこと、誰も見てゐない中に、一つ頂戴してやらふ』

（と一つの菓子を摘んで口に入れる。其時右手に人の來る氣配がする）

君子『おや、誰か來たやうだ』

（と慌ててゝ、眞直に立ち、手を構へて澄ます。そして口をもぐ〳〵させてお菓子を早く呑まふとしてゐる、其處へ右手から旅人二人登場する）

旅人甲『おや〳〵早やお地藏さんまで來た、もう近いから此處で一腹しやふか』

同乙『そうだなー、一休みしてもいゝな』

（二人はべつたりと、座つて脚を投げ出して、さすつたりする）

同『おや〳〵、澤山お供物が上がつてゐるねー』

同甲『そりやーそうだ、此お地藏樣には、何時だつて、お供物のきれめはないよ』

同乙『そうかい、何んだつてだい』

同甲『御利益が有るからさ、此のお地藏樣はね、生き地藏と云はれる程で、中々名高いあらたかなお地藏さんだよ』

同乙『なに生き地藏だつて？、はゝゝゝ（と地藏の顏を見る。君子は苦しくてつい手を下ろしたり、顏を動かせたりしてゐたのだが、驚いて、きちやんとする）でもお可笑な、賴り無さそうな顏をしてゐるせ』

同甲『おい〳〵そんな事を云ふと、罰が當るよ。何時だつたか、お前見た樣な不信心な旅人が、此處に來てそんな惡口を利いてゐたのだが、それ切り尻が土に喰付いて、動けなくなつて仕舞つたよ』

同乙『おい〳〵、氣味の惡るい事を云ふなよ、嘘にしたつて、氣持がよくないや』

同甲『それ見ろ、――何んだか此う體がぞく〳〵して來た』

（と震ふ）

同乙『そう云へば、俺も毛穴が立つやうだ』

（君子は面白ゝなつて、手で一寸乙の頭を打つ）

同乙『おい〳〵、冗談するな』

同甲『何がだよ』

同乙『僕の頭を叩いたじやーないか』

同甲『何を云つてるのだ、僕は知らないよ（君子は甲の頭ん打つ）おや君は怪しからぬね、僕の頭を叩いてさ』

同乙『何を云ふのだ、同じ事を云ッて（乙が打たれる）おヤ君又僕を叩いたね』

同甲『何を云ふのだい、僕は知らないよ、本當に知らないよ』

同乙『おかしいな』

（二人は驚かしそうに、ふと地藏を見る、君子は眼をむいて、うんと睨む）

甲乙『うわー、お、お地藏さんが』

（尻餅を突いて、わな〳〵と震える）

君子『これ、今何と云ッた、お前達の生命は取ッてやるから、覺悟をしなさい』

旅人甲『いや、いや私では御座ゐませぬ、ああ申したのは、此の男で』

同乙『いへ、滅想な、決して私では御座ゐませぬ、私は常日頃信心者で』

甲乙『どうか御勘辨を願ひます、これ此の通り』

（と手を合はす）

君子『いや勘辨ならぬ、前に出ろ、賽の河原へやッてやろ』

甲乙『うわー、生命ばかりはお、お助け』

（と二人の旅人は荷物も放って置いて、轉げるやうに、左手へ逃げて入る）

君子『はゝゝゝ、面白いなー、面白いなー、此れだからお地藏さまは止められないのだらふ。（と手を打つ）おや又來た、又來た誰やらが來た』

（と澄し込むと、此度は右手の方から、病人が杖を突いて、よろ〳〵と來る）

病人（地藏の前に來て）『南無有難やのお地藏樣・今日は愈々滿願の日で御座います、どうか此もろ〳〵の病氣を治して下さいませ（と丁寧に御辭儀をし）先づ第一に此のリウマチを治し給へ（と自分の肩をなでた手で、地藏の肩をなで）此の胸の病氣を治し給へ（と胸をなで、その手で地藏さまの胸をさする。君子は汚なくて、泣き出しそうな顏をするが、我慢してじいと立つてゐる）南無お地藏樣、此の眼病を治し給へ（と汚ない眼やにの附いた手で、お地藏樣の眼をなでやうとする。君子は顏をそむけて遁れやうとする

が、さぐり〳〵で病人は君子の眼をなでる。君子は色々と滑稽なしぐさをする）今日は滿願の日で御座ゐます、一週間の間毎日〳〵通ッて來ました、哀れと思召して治し給へ（と杖を地藏樣の腕に引きかけて置いて中央に出て、正面に向き）もう治ッただろふ、此お地藏樣はよう利くと云ふ評判ぢや、有難や有難や』

（と手や胸をなすつて見たり。眼を開けて見たりしてゐたが、急に怒り出し、つか〳〵とお地藏樣に近付き）

病人『これ、お地藏、これ地藏、お前は何と云ふ薄のろだよ、よう治さんのかい此んなに七日もの間せッせとお參りさせて置いて、もう治ッたかと思ひの外、これ此通り、何にも、よくはなッてゐないじやないか、御利益が有るなんて人を欺して』

（とその腕にかけてあつた杖をとり、お地藏さんを叩く。君子は痛くて痛くて、ぐろ〳〵と臺

にせ地藏

の上で廻はる）

病人『おかしな地蔵だな逃げてゐるよ、はゝゝゝ』

（と滅多打に叩いて、せつせと左手へ退場。直ぐに臺から飛び降りた君子は後を見送り）

君子『まあー酷い人、あゝ痛、酷い病人だこと、もうお地蔵様はよし度いね、早く本當のお地蔵さんが、歸ッて來るといゝになー、あー厭だ〳〵』

（と云ふ時右手の方に人の來る樣子がする、君子は泣き出そうな顏をして又慌てゝ臺に上り、お地蔵さんらしくしてゐると、汚ならしい乞食登場）

乞食『あーお腹がすいた、何か欲しいな（と見廻はしお供物を見る）おや〳〵此んな御馳走が有る、一ッ頂戴いたしませう』

（と遠慮なく、食べだす）

君子『これ〳〵乞食、それは食べてはいけないよ、預り物だよ』

乞食（少しも驚かず）『でも人を助けるのは佛樣の御慈悲で御座います』

（と又食べる）

君子『お前は地藏さんが物云ふても、恐はくはないのか』

乞食『へい〳〵、もう此うなッては、世の中に恐ろしいものは、何もありませ』

君子『とッて食はふと、賽の河原へやッたろか——』

乞食『どうぞ一ッ御願ひ申します。賽の河原で子守なといたしませふ』

君子『困つたわね——』

乞食『何が御困りですか（君子の顏を見て）おや〳〵可愛いお地藏さんだこと』

（と頭をなでる）

君子『おゝ汚ない、早くあちらへお出で、お前は厭いだよ』

乞食『誰樣だッて、私を好く方は有りませぬよ、はい〳〵御馳走さま』

にせ地蔵

（と右手の方に行つて、其處に座つて居眠りをする）

君子『あー厭だ〳〵、早く本當のお地藏歸ッて下されば、い、にな』

（と左手の方を見やると、兒供の歌ふ聲がするので又しかたなしに、きちやんとなる）

子供合唱〳〵春が來た　春が來た

どこに來た

山に來た　里に來た

野にも來た

花が咲く　花が咲く

どこに咲く

山に咲く　里に咲く

野にも咲く

鳥が鳴く　鳥が鳴く

どこに鳴く

山で鳴く　里で鳴く

野でも鳴く。

（と唄ひながら登場し、舞臺を廻はる）

君子（淡ましそうに）『まあー樂しそうだわね』

花子『おや雪子さん、何とか仰有ッたの』

雪子『いーえ……』

君子『妾だよ』

花子『おや〳〵お地藏樣なの、（と君子を見）おや違ふは、お地藏さんでは無いわ、それに、ほゝゝゝそんな眞似をして、おかしな方ね』

にせ地藏

雪子『本當におかしな人よ、（大聲に、右左に向い）にせ地藏が居るよ、にせ地藏だよ、皆お居でなさーい』

君子（驚いて、臺から飛び降り）『まあー、そんな大きな聲で、妾どうしやう』

（と右手に駈け入らうとすると、先刻の病人が出て來て、杖を振り上げる、此度は左の方へ行かふとすると、旅人二人が手を擴げて出て來る、乞食も起き上がる）

病人　〳〵この欺り者

旅人甲　〳〵このにせ地藏

同乙　〳〵よくも〳〵おどしたな

乞食　〳〵賽の河原へ　連れて行け

雪子　〳〵はゝゝゝ

花子　〳〵はゝゝゝゝゝ

一同合唱　〳〵はゝゝゝ

はゝゝゝ

うあはゝゝゝ

（と唄ふ中にも、君子を叩いたり、蹴つたりする、其時本物のお地藏樣が歸つて來る）

地藏『あゝこれ〳〵皆樣、許して上げて下さい、そんな事をなさるなよ』

一同『あ、これは御地藏樣』

（と差しひかえる）

地藏（君子の前に進み寄り）『君子さん、どうですか、お地藏さんも中々樂じやー有りますすきい』

君子獨唱〳〵お地藏さん初め　皆の方

初めて夢が覺めました

誰にも務は　あるものと
　初めてあたしは知りました
昔を思へば　恥かしい
　どうか許して頂戴な
此れから　心を入れ替へて
　きつと　いゝ子になりまする

地蔵獨唱　よく云つた

病人同　それがいゝ

地蔵同　人の心を救ふのが
　まことの私しの務だよ

（と歌つてお地蔵様は、君子から、前掛を貰ひ、自分の頸に掛け、襄に直ほる。一同は手をつ

ないで、其周圍を唄ひながら廻ほる）

雪子同　町のはづれの　お地蔵さん
花子同　朝から晩まで　立つてゐる
病人同　暑い日中も　雨の夜も
乞食同　いやなお顔は　なさらない
一同合唱　ほんに　お地蔵さんは　心棒者。

町のはづれの　お地蔵さん
　病人であろと　乞食であろと
どんな汚ない　子供であろと
　いやなお顔は　なさらない

にせ地蔵

歌の中

ほんにお地蔵さんは　親切者よ。

―幕―

欠

小年劇

友達

二場

登場人物

少年　ジュリアン
其友　ペテロ
侍從　國王
獄卒　甲
同　乙
同　丙

欠

第一場

（舞臺）　ローマの一獄舍内にて、粗末な椅子二つと、片隅に寢臺一つあれば結構です

幕開くと、中央の椅子に粗末な服を着けた二人の少年が、頰杖を突いて、淋しく向ひ合つてゐる。

ペテロ（顔を上げ）『ジユリアン君、もう此うなつては、その悲歎も役に立たぬ、靜に觀念して、男々しく死につかふ』

ジユリアン『生命が惜しさの悲歎では無い、我々は戰に出る時、既に生命は無きものと覺悟はしてゐる。だが思ふても思ふても心殘りなのは、老いたる母上のことだ』

ペテロ『無理はない、無理はない、親一人子一人の君の身の上だから、そう有らふ、だが昨日の申し渡しに依ると、僕は兵卒である丈けに罪も輕く、近々

追放されるとの事だから、國へ歸つたら君に代はつて、お母さんを見て上げるから安心して居給へ』

ジュリアン『持つべきものは友だ、有難う、そうして呉れ給へ、それでどんなに僕の心が憩まるか知れない――（過ぎし日を思ひ出して）思ひ出すと愉快な戰だつたな』

ペテロ（同じく活潑な調子になり）『そうだ〳〵、攻め寄せたローマの兵隊を迎へて、あのティロンの丘で戰つた』

ジュリアン『僕が一方の旗頭だ』

ペテロ『進め〳〵と振る劔に、心は勇む馬も勇む』

ジュリアン『ひら〳〵と飜へる旗に、夕日が紅く照り映へて、まるで畫の樣だつたね』

ペテロ『彼方にも此方にも激しい戰が初まつた、甲に楯に劔が入り亂れて、びか〳〵光る』

ジュリアン『紅い血に染つて人が倒れる』

ペテロ『それを踏み越え、飛び越えて、一目散に突き進んだ』

ジュリアン『敵は適はず、遂々逃げ出したから、我々の一隊は何處までも追つた、追つた』

ペテロ『後ろの方にラッパは鳴つた、勝敗は決したのだ、我軍は勝つたのだ、萬歲々々と云ふ聲が遠くで聞こえる』

ジュリアン『引き上げやうと、馬の手綱を返した時に』

ペテロ『突然取卷いた敵の伏兵』

ジュリアン『おのれと戰つたが、多勢に無勢』

ペテロ『戰には勝つたが、我々は捕虜になつた』

ジュリアン（悲しそうにペテロと顔合はせ）『殘念だッたな！』

ペテロ『殘念だつたな！』

（此時長い槍を持つた獄卒登場し、槍をこつんと突き鳴らし）

獄卒『こら默れ、貴樣達捕虜は勝手にしやべる事を許されては無いのだぞ、法を破ると此の槍が御見舞ひ申すぞ、このきら〳〵と光る槍の穗先が眼につかぬか』

（二人は默つて差しうつむいてゐる）

獄卒『こらジュリアン、今お前に國から手紙が來た、お情で持つて來てやつたのだ有難く思つて受け取れ』

（とポケットから取り出した一通の手紙を差し出す）

ジュリアン『それは御心切に有難う』

（と受け取れば）

獄卒『靜にせんといけないぞ』

（と云ひ捨てゝ、獄卒退場）

ジュリアン『何處からの手紙だらう、（と調べて見て）あ、國の母からだ、母からだ』

（と急いで封を切り讀み下だす、ペテロは椅子を近付けて聞く）

ジュリアン『私の可愛い、ジュリアンよ、お前はどうして暮してゐる事だらう、私は毎日々々案じてゐます、獄舍の中と云へば恐ろしい所、定めて身を切る樣な辛らさであらう、私は毎夜毎夜それを思ふと眠られないでゐる。お前は何時許されて歸るのか、待ち切れないで私は病氣になりました（茲迄讀んで顔を上げペテロと顔を見合はせ涙ぐましくなる）そして段々惡くなるばかりです、そ

して死ぬ前に一度お前に逢ひ度い心で一杯になつてゐます、王様に願つて一度歸つてお吳れ、私はもう待ち切れない、母より』

ペテロ『君、困つたねー』

ジュリアン『どうしやう、母は僕が許されて歸る日を待つてゐる、それに僕はもう近々死刑になるのだ、何と云ふ悲しい事だらう、それに病氣になつてゐると云ふ、僕はどうすればいゝのかなー』

ペテロ『君、それでは一度歸つて會つて來給へ』

ジュリアン『歸れる程なら、此んなに心配はしない、あの情知らずの王様が、死刑囚を一歩でも城外に出す樣な事はあるまい』

ペテロ『然し僕が身代はりに立つて遣らう』

ジュリアン『え、（と驚き友の顏をまじ〳〵と見る）君、それは本當か』

ペテロ『友の爲めにその生命を捨つ、是れより大いなる愛はなし、と云ふ敎へがある、喜んで身代はりに立たう』

ジュリアン（ペテロの手をとり）『有難う〳〵、よく云つて吳れた、では僕は行つて來るだが僕を信じてゐて吳れ、決して死刑の時間迄に歸つて來ない樣な僕ぢやーない』

ペテロ『いや萬一違へば、君の身代はりに、僕は生命を棄てやう、君は母さんへ孝行し給へ』

ジュリアン『いや、僕は友の心切を仇にして返す事は決してしない、信じてゐて吳れ給へ』

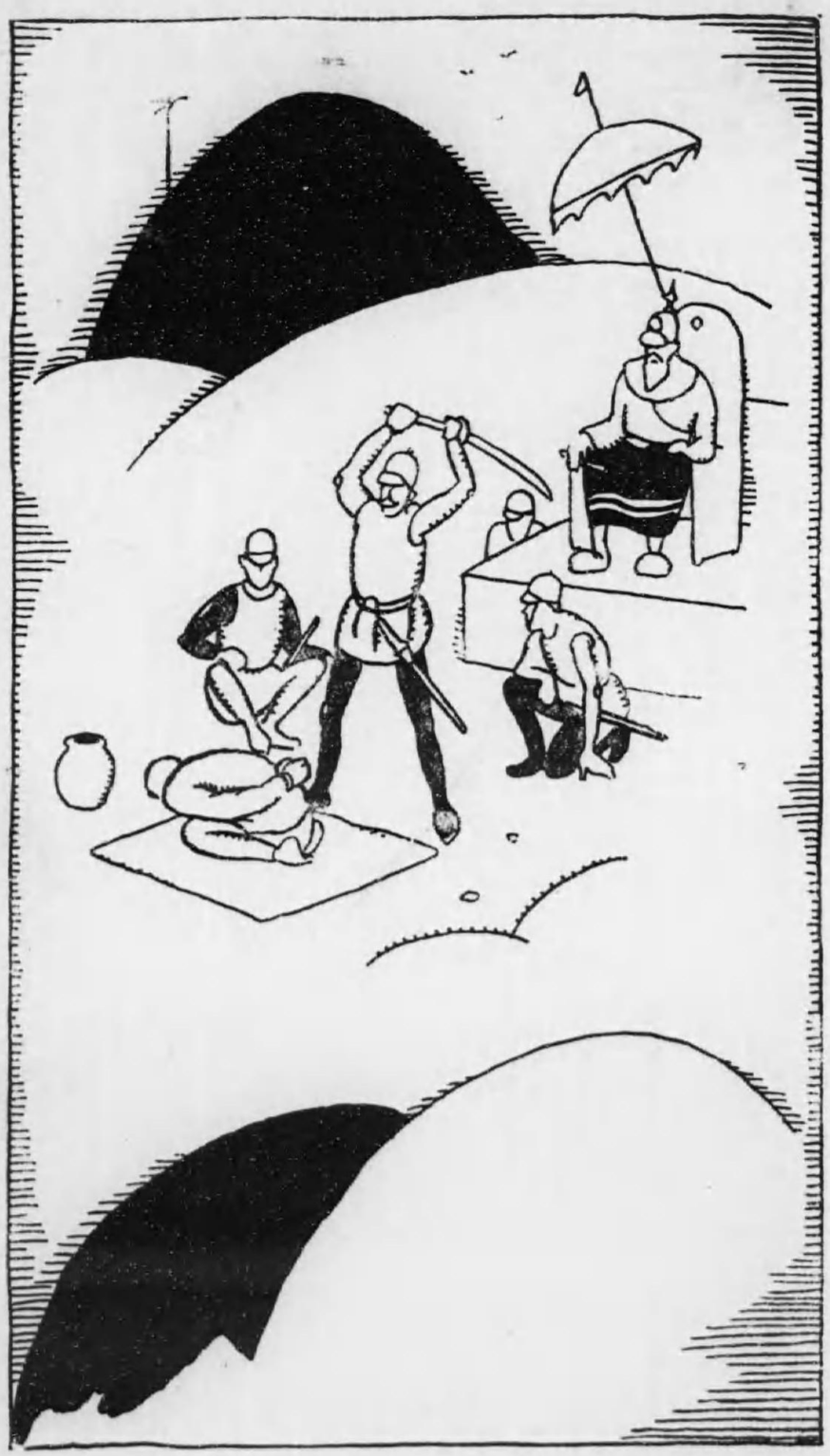
とペテロの手をとり、固く握つてその顏を見詰めてゐる。そして靜に

——幕——

第二場

（舞臺）　刑場にて、右の方に王様の椅子を置いてある。
靜な悲壯な奏樂の中に、幕が開くと、頓て左手の方から獄卒甲乙丙に引かれて、ペテロ登場

獄卒甲『いよ〳〵王様の法律に由つて、お前を死刑にせねばならん』
同乙『卑怯なジユリアンは、お前を身代はりに立てゝ置いて逃げて了つたのだ』
同丙『可哀そうだが、もう覺悟して友の身代りになるがいゝ』
ペテロ（靜に顏を上げ）『喜んで刑を受けませう、併しジユリアンは決して卑怯な男ではありませぬ、彼は義に富んだ男です』
獄卒甲『だつて、此の通り期日になつても歸つて來ないではないか、今日迄に歸



つて來なければ、身代はりになつたお前が殺される事は分り切つた事だに』

ペテロ『そうです、だが何か止を得ない事情が起つてゐるに相違有りませぬ』

獄卒乙『はゝゝゝ、友達を信ずるのもよいが、程があるよ此の世の中に一つしか無い生命迄掛けて身代はりになる奴が有るか、やれ〳〵可哀そうに』

（此時ベルが鳴り響く、それは死刑執行の時間の來た事を知らせるのです）

同丙『おや時が來た、死刑の時が來た』

同甲『王様が御臨席になるだらう』

（と三人右の方を見る、其處へしづ〳〵と王様は侍從を從えて登場し、椅子に掛けられる）

國王『いよ〳〵時が來たのだ、これペテロ顏を上げよ（ペテロはひざまづき、顏を上げる）お前は刑を受けねばならぬのだぞ』

ペテロ（きつぱりと）『はい覺悟いたして居ります』

國王『惡い友達を持つた事を、後悔しては居ないのか』

ペテロ『惡い友達ではありませぬ、ジュリアンは私よりも立派な有用な人間です』

國王『でも死をお前に着せて、歸つて來ないではないか』

ペテロ『それには何か、事情が有るので御座いませふ』

國王『そうか、そう思つてゐるのか、死んでも心殘りはないか』

ペテロ『はい、何んにも御座いません、ジュリアンが無事に、老母の孝行をして吳れゝばいゝと思つてゐます』

（又ベルが鳴り響く）

國王『國の法律に依つて、死刑を行ふ』

（と立ち上がり、獄卒に頷もて差圖をする、獄卒甲乙はペテロを引きて、中央に座らせ、丙は長い劔をとつて、その背後に廻はる）

國王『よし切れ！』

（と手を上げる、丙は劔を拔き、頭上にかざし、今や切り下さんとする、其時慌たゞしく右手よりジュリアン登場する）

ジュリアン『あ、王樣待つて下さい、待つて下さい、ジュリアンは歸つて參りました』

（と平伏する）

國王『あー、ジュリアンか、獄卒待て』

（と云つて、椅子に掛ける、獄卒も劍を收め、三人は後ろにひかへる）

ジュリアン（ペテロに近付き）『ペテロ君、濟まなかつたねー、此んな憂き目を見せて、實に濟まなかつた、實は母に暇乞をして、それから馬で駈けて歸りかけたのだが雨の爲めに河水が增して渡る事が出來ず、ずつと河上迄遠廻はりを

したものだから此んなに遲くなつた、堪忍して吳れ給へ』

ペテロ『いやそんな心配は無用だ、僕はむしろ君が母樣の傍に居て孝行して吳れた方がいゝと思つて居た、僕は一人者だから、死んだつて悲しむ者は無い君の爲めだから喜んで死のう、一層今から引返して國へ歸つて吳れ』

ジュリアン『何を、何を君は云ふのだ、そんな事が出來るものか、君のお影で母に暇乞も出來て、此んなうれしい事はない、もう思ひ殘す事はないのだ——王樣どうか刑に處して下さい』

ペテロ『いやそれに及ばない、僕は既に覺悟が出來てゐる、僕が受けやう、君は國に居る年老いた母上の事を思はないのか』

ジュリアン『併し君を殺す事は出來ない、何の爲めに僕は晝も夜もぶつ通しに駈けて來たか、皆君の友情を仇で返す樣な事にしたくないからだ。有難うね、

君は充分に僕に盡して吳れたのだ、君心から御禮を云ふよ——さ、王樣時の遲れぬ中に早くお手を下して下さい』

（と座つて目をつぶる、王樣は何か靜に考へてゐる、獄卒の丙が立つて劍を拔ぎシュリアンの後に廻はり、ふりかざす）

國王（顏を上げ）『これ待て、兩人を許してやるがいゝ』

侍從『でも此の重罪人を？』

國王『いゝ、許して遣れ、俺は今迄に此んな美しい人心を見た事はない、立派な友達だ、俺は此れを見て長年の夢が覺めた、此れからは情を以て政事を行はう……

ジュリアンにペテロ、只今限り許してやる、國に歸つて仲善く暮らすがいゝ』

友達

シユリアン、ペテロ（喜び）『え、あの兩人を助けて下さいますか、有難う御座います』

（と平伏する）

歌〜花散り失せては
薪に切られ
家貧しければ
人に捨てらる
誰をか頼みて
何にか頼らん
ただ神の結ぶ
愛の友あり

との讃美歌が何處からか聞こえ、其歌の中に靜に

幕

少女劇 サンタークロース

二場

登場人物

少女 シレニア
その母
乞食實はサンタークロース
小女の友 甲
小女の友 乙
小女の友 丙
小女の友 丁

第一場

（舞臺）貧しいシレニアの内で、中央にテーブルと椅子二脚とが有り、右の隅に寢臺を置いてある。

幕開くと正面にシレニアの友、甲乙丙丁の大勢が奇麗な衣物を着て並んでゐる、そして次の歌を愉快そうに合唱してゐる。その樣が貧しい風のシレニアは、片隅に小さくなつて、羨ましそうに見てゐる。

小女合唱　うれしいな　うれしいな　クリスマス
明日はうれしい
奇麗なお着物に　靴はいて
お寺詣りも　うれしいな

サンタークロース

うれしいな　うれしいな
クリスマスツリーに　つるされた
まりや人形の　數々を
分けて頂く　うれしいな
うれしいな　うれしいな
あすはうれしい　クリスマス。

シレニア『あたしもお仲間に入れて、下さいな』
友甲『えゝいゝとも、妾達おさそひに來たのですもの、だから早くお着物を着替へていらつしやいな』
シレニア（自分の着物を見て、悲しそうに）『だつてあのーいゝでしやう、此れでもね』

友乙『いけないわ、そんな汚ないのは駄目よ』
友丙『私達の樣なので無くつてはねー』
友丁『そんな汚ないなりでは、遊べないわ』
シレニア『だつて、あのー、あたしもう無いのですもの』
友甲『おや〳〵、無いの、まあー〳〵あきれたわねー、ぢやー仕方が無いわ』
友乙『シレニアさんだけ、お内でゐらつしやい、私達は行つて遊ぶわ』
シレニア『そんな事云はないで、一緒に遊んで下さいよ』
友丙『でもいやだわ、そんな乞食見たいな子と遊べないわ』
友丁『では左樣なら、皆さん行きませふ』
一同『左樣なら、汚ないシレニーさん、左樣なら』
（とわざと丁寧にお辭儀をして、又次の歌を唄ひながら、左手に退場します）

サンタークロース

小女合唱　うれしいな　うれしいな
明日はうれしい　クリスマス
奇麗なお着物に　靴はいて
お寺詣りも　うれしいな

うれしいな　うれしいな
あすはうれしい　クリスマス

（シレニアは見送つてゐたが、悲しくなつて、テーブルに駈けて行き、泣き伏す
其時右手から母親が登場します）

母（シレニアを見て、驚いて駈けて行き、肩に手を掛けて）『これシレニー、妾の可愛いシレニーや』

シレニア（母と知ると、急いで涙を拭き、笑顔を作りて振向く）『母さんなーに？』

母（案じそうに）『お前どうしたのだい、泣いてるのじやーないの？』

シレニア『いーえ、ちつともあたし泣いてなんか居ないわ（と云つて笑つて見せる、そして椅子を離れて）さあー母さんお掛けなさい、今晩は寒いのねー』

（と椅子に掛けた母の後ろに廻ほつて、其肩に抱き付く）

母『寒いのも道理だよ、もうお前明日はクリスマスじやーないかね』

シレニア（頷いて）『そうよ、母さん明日はクリスマスだわね』

母『お友達が皆々美しいお着物を着てゐるのに、お前には一枚だつて無いし、靴下だつて、そんなに破れてゐるし、ねーシレニーや堪忍してお呉れよ』

シレニー（わざと快活に）『母さん、そんな事ないわ、あたしこれでも幸福者よ、世の中には家さへ無い人や、母さんの無い人やが有るのでしやう、それにあた

サンタークロース

しには、此んな暖い家だつて、それから、一番好きな母さんだつてあるのですもの、着物や靴下なんかどうでもいゝわ、何ともないわ』

母『善い子だね、本當に妾は幸福だ。お前の樣な善い子を與へて下さつた事を思ふと、何時でも有難くつて、神樣に感謝してゐるのよ。――そうそうもうお腹がすいたでしやう。一寸待つてお居で、いゝ物を持つて來て上げるからね』

（と右手に退場し、直ぐに皿に盛つた、サンドウイッチを持つて來る）

シレニア『母さん、それなーに？』

母『お前のお好きなサンドウキッチだよ、さあー此處へ掛けて、お上り』

（とシレニアを向ふ側の椅子に掛けさせる）

シレニア（一ッ摘んで食べ樣としたが、ふと母の事を思ひ手をおいて）『母さん、あたしお腹はい

ゝわ、だからお母さんお上りなさいな』

（と皿を押しやる、それを母が又押して）

母『いゝえ、母さんは充分、母さんはね、お前が食べて呉れるのを見てゐる方が一番うれしいのよ』

シレニア『そーをー、だつて？』

（と皿を見てゐる時、戸が叩く音がする）

母『おや誰樣か見えた樣ね』

シレニア『開けて上げませふか』

母『えゝ、そうして頂戴』

（シレニアは左手に入り、間も無く汚れ果てた、そして腰の屈つた爺さんを連れて來る、其爺さんは肩の大きい袋を片隅に置く）

サンタークロース

シレニア『母さん、此方よ』

母『おやお見掛け申せば旅の御老人の樣ですが、定めし寒い事で御座ゐませふ　さあー〳〵お掛け下さいまし』

（と椅子をすゝめる）

乞食『はい〳〵、有難う御座ゐます、目當もなしに旅を廻つて居るもので御座ゐますが、此の寒さでもう體も凍て了ひそうになりましたので、心棒が出來ずしてお邪魔をいたしました』

母『左樣で御座ゐますか、それは〳〵御困りでしやう、御見掛け通りの貧さで何もお構ひは出來ませぬが、御ゆつくり御憩み下さいまし』

シレニア『ねーお爺さん、お腹がすいてゐるのでしやう』

乞食『お辱しい事ですが、もう三日も頂きませぬので……』

シレニア『そう、可哀そうにね、では此れをお上り、今母さんから頂いたのですけれど、あたし今欲しくないからお上りなさい』

母『娘の心切を受けて遣つて下さいまし』

乞食『有難う御座ゐます、では頂きませふ』

（と手をつけ樣とすると、シレニアは慌てゝ止め）

シレニア『あ、お爺さん一寸待つて下さい。珈琲を上げませう、ね、暖くしてゐゝでしやう』

（と云つて、右手に退場、直ぐにコーヒをこぼさぬ樣、危つかしい樣子で持つて來てすゝめる）

乞食『御心切さまに、有難う御座ゐます』

（と禮を云ひ、一寸の間目をつぶつて感謝の默禱を捧げて、頓てむしやむしやと、食べては珈

サンタークローース

非を飲む、其樣子をシレニアと母とはうれしそうに見てゐる）

乞食（食べて仕舞つて）『御二人樣の御心切で生命が助かつた樣な氣がいたします。人情は紙より薄ふなつてゐます此頃に、御二方の樣な情深い方々を見ますのは不思議に思へる程で御座ゐます』

母『いーえ、私共人間同志は皆神樣の子で御座ゐますからね、お互に助け合ふのは神樣への務で御座ゐます』

乞食『賴もしい事を仰有る、（シレニアに）娘さん有難う御座ゐました、御蔭樣でつかり、元氣になりました』

シレニア『そう、それはよかつたわねー、では お爺さん早く寢ると暖まつていゝわね、お母さん、あたしも寢ませうか』

母『あーそれがいゝ、ぢやーお出で』

（母はシレニアを伴れて、寢臺の下に跪き、暫らくお祈をした後、シレニアは寢臺に横たはる、母はその上に毛布をかけてやる、又一枚の毛布を乞食に與へる）

母『さーお爺さん、別に外に寢臺もありませぬから、これにくるまつて下さいまし、妾はあちらで失禮いたします』

乞食『えーえー、結構で御座いますよ、雨露さへ凌ぐ事が出來ましたら、何より で御座います』

（母は右手に退場す、シレニアは深く睡つて仕舞ふ）

乞食（急に態度が變はり、腰もしやんと伸びる）『あー今日こそは愈々今年中での寶物を見付けた、何と云ふ美しい優しい心を持つた人々であらう』

と云つて、袋の中から赤い衣物、赤い頭巾を取り出して身に着け、さもうれしそうに、ほゝえみつゝ足音を忍ばせて、シレニアの方へ近付いて行く、其時早く

——幕——

第二場

（舞臺）同じ部屋であるが、すつかり奇麗に變つてゐて、シレニアの寢てゐる寢臺もテーブルも椅子も悉く立派なものになつてゐる）

眼やかな奏樂で幕が開かれると、立派な衣物や美しい新らしい靴を着けたシレニアが上等の毛布に覆はれて寢てゐる、テーブルの傍の椅子にはサンタークロースが座つてゐる）

サンタークロース獨唱〜〜眞珠のやうに美しい
野菊のやうにやさしい
私の好きな　大好きな
可愛いシレニアさん
目覺めて御覽

神樣の下さつた幸福が
一杯手を擴げて
待つてゐる
私の好きな　大好きな
可愛い　可愛いシレニアさん
ぱつちりと
大きなお眼を　開けて御覽

（シレニアはふと覺めて、不思議そうに、家の中を見廻はし、それから爺さんを見てびつくりしてはね起きる）

シレニア『まあー、奇麗だこと、あなただーれ？』

クロース『あー目が醒めましたかシレニーさん、私は昨夜の乞食ですよ』

サンタークロース

サンタークロース

シレニア『え、昨夜の乞食？、それがどうして此んなになつたの？』

クロース『はゝゝゝゝ、その驚きは尤もだが、私は本當はサンタクロースだよ』

シレニア『え、（驚き）あのサンター、クロースの　お爺さんなの？、あの子供に心切な、あの善い人の』

クロース『えー　そうです、毎年々々此うやつて、世の中の心の美しい人を探して歩いて、そう云ふ人が見付かれば、うんとお禮をして、一緒に喜ぶのが私の樂しみだよ』

シレニア『まあーそう、いゝ方だわねー、そして、お爺さん此處は何なの（と又家中を見廻はり）此んな奇麗なお内見た事が無いわ』

クロース『はゝゝゝ、此處はお前さん方の内ですよ、私がお前さん方を幸福にして上げ樣と思つて、一晩中に造り替えて上げたのだよ』

シレニア（躍り上がつてうれしがり）『まあー、うれしいわね、そう此れ私のお内なの』

（と云つて、椅子にかけて見たり、寢臺に飛び上つたりして見る、其時母が右手より登場、同じく美しい、着物を着けてゐる）

母『まーまー、お前シレニーどうしたの？』

シレニア（母に近付き）『どうしたつて、まあーー母さんどうしたの、何て美しいお着物を着てるのでしやう』

母（ふと自分の着物を見て驚き）『おやーーーーーーーー、だけどお前も』

シレニア（自分の着物に初めて心付き）『あ、まあー奇麗ねー、お姫樣の樣なお着物だわ』

（とぐるーーー廻つて見る）

クロース『はゝゝゝゝ、御不審は尤もですが、皆私が差上げたのです』

母『それであなたは一體誰樣で御座いますの？』

サンタークロース

シレニア『母さん、此方はね昨夜のお乞食さんで、本當はそれあの心切なサンタークロースの爺さんでしたのよ』

母『まあー(と驚き、サンタークロースに向ひ)それは有難う存ました、どんなに私達母子は幸になつたか知れませぬ、本當に幸福で御座います、勿體ない樣な氣がいたします』

クロース『皆あなた方の御心から生れたのです、お二人の樣な正しい方が幸福を享けるのは、當然の事です』

(と云ふ時、左手から友の少女甲乙丙丁登場)

友の甲『まあー、夢か知らん、何時の間にこんなに變つたのだらふ』

(とぐるぐる見廻はり)

友の乙(シレニアに)『まあーシレニアさんのお美しい事、どうしたと云ふのでしやう?』

シレニア『此の方が皆下すつたのよ、此爺さんはね、サンター、クロースの爺さんよ』

友の丙『え、サンター、クロースのお爺さんなの(お爺さんの傍に寄り)本當なの、お爺さん?』

クロース『そうだよ、本當だよ』

友の丁(同じく傍に寄り、其手に縋つて)『でしたらねお爺さん、あたしにも下さいな、此んない、着物や靴を』

クロース(笑ひながら)『お前方の樣に、貧棒人を酷めたりする樣な、心の善くない者には遣れない、貰はふと思へば、心の美しい良い兒にならなくつてはいけない』

友の甲、乙、丙、丁『なるわ、なるわ、きつとなるわ』

クロース『そうかい、又來年來るから、其時には良くなつてゐたお子にクリスマスの贈物を上げませうね』

友の甲乙丙丁『そう、うれしいわ、きつと良い兒になつてゐるわ』

シレニア『皆さん、あたしと遊んで下さるの』

友の甲『えー、遊びますとも』

友の乙『仲よくしませうね』

友の丙『一緒に歌を唄ひませうか』

シレニア少女一同合唱

うれしい　うれしいクリスマス
不幸な者を　恵まんと
神の子エスの生れまししし

うれしい　うれしいクリスマス
遠から待つた　クリスマス
今日はいよ〳〵クリスマス

母とクローズも加つて

うれしいな　うれしいな
正しき者は恵まれて
皆でうれしいクリスマス
今日はいよ〳〵クリスマス

合唱の中に、賑かな奏楽が混じつて、靜に

—幕—

哀話

巡禮唄

一場

登場人物

巡禮の姉　お絹
妹　お鶴
女學生
奥様
料理家のお上さん
興行師

（舞臺）　ある町の公園ベンチが一つ置いてある。

静に幕開くと、巡禮姿のお絹と妹お鶴とが、重荷げに足をひきづりながら、次の巡禮唄を向ふから唄ひながら登場す

巡禮唄　父母の
恵み深き粉河寺
佛のちかい
たのもしきかな

お絹『お鶴ちやん、さぞ草臥れたらうね』

お鶴『えー姉さん、あたし脚が痛くつて、それにそれにお腹が空いて、もう歩けないわ』

お絹『そうだらふね、毎日その小さい足で六里も七里も歩くのだから嘸足も痛か

らうね、それに今日は朝から未だ碌々お飯も上げないのだからね、よしよしも少し我慢おしよ、何處かの茶店でゞも休まして貰ひますからね』

お鶴『でも、でも姉さん妾ちう眼が廻はりそうで、歩けないのよ』

お絹『それは困つたわ、それでは此處で暫らく休んで行きませうね』

（と腰の手拭を脱して、ベンチを拂ひ、妹をかけさせ、並んで自分も掛ける）

お鶴（足をさすりながら）『ねー姉さん』

お絹『なーに？』

お鶴『恁うして毎日〳〵歩くのはいゝけれど、妾達は何時が來たら父さんに合へるのでしやうね』

お絹『さあーそれがねちつとも見さかいが付かぬのよ、もう國を出てから一月にもなるけれど――あー考へれば考へる程心細いわねー』

（お鶴はしく〳〵泣く、姉は悲しそうに俯向いてゐると、マンドリンを持つた女學生が通り掛る）

女學生（ふと二人を見て）『貴女方お二人は何をしてゐらつしやるの。何だか泣いてゐなさるやうですが、どうかなしつたの？（お絹は一寸女學生の顏を見て、又俯向きもぢ〳〵してゐる）わけが有るなら遠慮なく仰有つて御覽、私の出來る事なら又お力にもなるわ、ね、云つて御覽』

お絹『はい、御心切は有難う御座います。私共二人は姉妹で御座いまして、父を尋ねて巡禮をいたして居ります』

女學生（眼を丸くして）『まあー お父さんを？芝居の樣だわねー』

お鶴『あたいのお父さんはね、あたいの幼兒の時に國を出たのよ』

お絹『そして此間迄母と三人て、わびしく暮して居ましたが、そのたつた一人の

頼りの母が、もう三月前に死まして……』

（とお絹は袖を顔に當てて、さめ〳〵と泣く）

女學生（氣の毒そうに）『そう、それは可哀そうね、此の廣い世の中に頼る人もないのだわねー、本當に西洋の悲しい物語の樣ね、あの『未だ見ぬ親』つて小說を知つてるの？』

お絹『いへそんなものは、一向に存じませぬ』

女學生（興醒め顏に）『そう、つまらないわねー、だがどう思つても詩的だわねー、彼方此方と人の憐れみを乞ひながら、漂浪ひ歩いて巴里の街に來る、そしてふとした事から父に邂逅ふといふ筋だわね』

お鶴（姉に）『姉さん、もう行きましやうか』

女學生『あ、まーお待ちなさい、貴女方恁うしない事、此れからわ姉さんの方が

マンドリンを彈いて、妹さんの方が歌を歌ふのよ。そうして歩くとお金も貰へるし、それに人の眼によく付いて、早く父さんが分るわ』

お絹『一日でも早く合ひ度いので御座いますから、どんな事でもいたしますが、そのマンドリンとか申すものが御座いませぬ』

女學生『そう困つたわね、あ、いゝわ妾は内に歸れば未だも一つ有るのだから、此れを上げるわ』

お絹『でも妾達は、そんなものを習つた事が御座いませぬ』

女學生『そんな事はちつとも構はないわよ、恁うして持つて、此方の手で彈けばいゝの、爪も上げませう、一寸持つて御覽』

（と手を添へて、持ち方彈き方を敎へてやる）

お絹『此れでいゝので御座いますか』

女學生『あーそれでいゝのよ、それで何でも勝手に彈いてゐれば、直ぐに上手になるわ』

お絹『有難う御座います、では此れから習つて、仰有る通りにいたしませふ』

女學生『それがいゝわ、そうすると立派な小說だわ、では左樣なら、氣を付けていらつしやいよ』

絹、鶴『有難う御座います』

（女學生は退場する）

お鶴『姉さん、此れが有つたら、父さんに早く合へるの？』

お絹『えー、此の方がいゝかも分らないと思つてるのよ』

（其時奧樣風の人が登場し、二人に近付く）

奧樣『今委しい事はあちらで聞きました、お二人は本當に御可愛そうな身の上ね

——それで何なの、お前さん方は、其マンドリンを持つて巡禮するつもりなの？』

お絹『はい、お嬢さんが折角御心切に仰有つて下さるものですから』

奧樣『ほゝゝゝ、だけどそれは西洋の御話だよ、巡禮さんがマンドリンなんか彈いて歩いちやー、餘程見ともないわよ、お前さん方そうしてゐてもお金もないらしいお腹も空いてゐるらしいし』

お鶴『え、小母さん、あたしお腹が空いてるのよ』

（と云ふに姉は顏を紅めて、俯向く）

奧樣『それ御覽、そんな事をして、若し病氣にでもなつたら、それこそ大變よ』

お絹『左樣で御座います、誰一人賴る方も御座いませぬのですからね』

奧樣『だから一層こうしない？、あのね、とりあへず、二人共妾の內へ來て御奉

公してはどう？、恰度お女中と子守さんが無くて困つてゐるのですから都合がいゝわ、そうして又ゆつくりとお父さんを尋ねる方がよくは、ないかい？』

お絹（考へて居たが顔を上げて）『そう仰有れば、そうで御座いますね、恁うして居りましても何時逢へると申す見さかいも付きませず、その上病氣にでもなりましては本當に困りまりから、では一層そう御願ひ申しませふか』

奥樣『そう、早速承知して呉れて有難う、それでこそ妾が口を利いた効が有つたと云ふものだわ、では三十分ばかし此處で待つてゐて下さいね、一寸用を濟ませて歸りに連れて行くとしますからね』

お絹『はい、どうかよろしく御願ひ申します』

奥樣『では何處へも行つちやーいけませぬよ』

（と奥樣は退場する）

お鶴『姉さん、あたし達御奉公するの？』

お絹『えー、そうすると、暖いものもお腹一杯戴けて、御家の中で寢る事が出來るのですから、いゝでしやう』

お鶴『えゝ、早く何か戴き度いわねー』

（此時料理家のお上さんが、奥樣の入つた方を見送りながら登場して、二人に近付き）

お上『あなた方本當に、あの奥樣の御内へ御奉公するの？』

お絹『はい、そういたそうかと、存じて居ります』

お上『それは心得違ですよ、よく考へて御覽、あんなお素人の方の内に居ると、何年經つても、お父さんには逢へませぬよ、假令お父さんが門を通つたつて知れやーしないわ』

お絹（心配そうに）『それもそうね』

お上『私の内は料理屋ですがね、毎日毎晩色々な人が引きり無しに、出たり入つたりするのですよ、だから自然、澤山の人の眼にも付くし、又人の噂も耳に入りませふしね、人を尋ねたりする人には、大變便利よ、だから一層内に來ないかい？』

お絹『左樣で御座ゐますね』

お上『本當に、そうなさいよ、内の仕事と云つても別に六ヶ敷い事でもないし、誰にでも出來てよ、そして體も樂だしねそうしませふね』

お絹（考へてから）『ではそうお願ひ申しませふ、どうかよろしくお願ひ申します』

お上『よく承知して下すつた、では内へ訪ねて來てお呉れ、内はね、そら此の道を眞直に行つて、（と指差して教へ）それ、あの柳の木の所を左へ折れると、二

軒目の内だよ、分つて』

お絹『はい分りました』

お上『では一寸お顧客へ廻つて來ますから、先に行つて居てお呉れ、よろしいか』

（と云ひ捨て、退場する）

お鶴『姉さん、あの方心切そうな方ね、早く行きませふ』

お絹『そうね、では直ぐに行きませふか』

（と手をとり、立ち上がつて、行かうとすると、後から興行師が登場する）

興行師『あー娘さん、一寸お待ちなさい、一寸御待ちなさい』

お絹『何か御用ですの？』

興行師『御用どころか、大變だよ、まあー其處へお掛けなさい、大變だよ』

（と云ふから、二人は又ベンチに歸つて、腰を掛ける）

お鶴『小父さん、何が大變なの』

興行師『お前さん達は田舍から來たのらしいが、街の人は田舍の人と違つて、油斷がなりませぬよ、今のお上さんが惡いと云ふ譯ではありませぬが、能く舍田から出た人を見ると、巧い事を云つて騙しては人買に賣つたり、支那の方へやつたりしてお金儲けをする人が澤山あるのですよ、支那へ等やられたら一遍に殺されて生膽を取られるんですつてさ』

お絹『え、それは本當ですか』

興行師『本當だとも、よく新聞にも載つてゐますよ、だから氣を付けねばいけませぬ——えー私は歌劇の興行師ですがね、一つ歌劇の女優になりませぬかそうして、舞臺に出てゐると、お客樣の中に若しやお父さんが來て居て、目出度く邂逅ふと云ふ具合にならないにも限りませぬよ、何と云つても隨

分と大勢の人が代はる代はる見に來るのですからねー』

お絹『左樣で御座ゐますね』

興行師『是非そうなさい、その方が身の爲めだ、ねーよく考へて、惡い人に騙されない樣にするのですよ、よろしいか考へが付いたら後から直ぐにお出でなさい、私が引受けてお世話しますよ、それ此路を右へずつと行つたら、オペラ座と云ふのが有りませふ、分らなかつたら、オペラ座は何處だと人に訊いて、訪ねてお出でなさい、よろしいか』

お絹『はい有難う御座ゐます』

興行師『なるべく其方がいゝ樣に思ふがね、是非、まあー一遍訪ねて御越しなさい』

（と云つて、興行師は退場する）

お鶴『姉さん、あの小父さんの所へ行くの？』
お絹『いえ、もう行かないつもりよ、今あの小父さんが云つたでしやう、街の人は恐いつてね』
お鶴『生き膽を取るつて云ふの？』
お絹『えーそう云つたでしやう、そしてそう云ふあの人も、やつぱり街の人でしやう、だからあの人もやつぱり恐くなつたわ』
お鶴（心細げに）『では姉さん、此れからどうするの？』
お絹（お鶴の手をとり）『やつぱり鶴ちやん、二人で巡禮をして廻りませうね』
お鶴（俯向いて）『えゝ』

お絹獨唱（悲しき曲にて）

父を尋ねて遙々と

山越え野越え旅すれば
夕の鐘の身にしみて
悲しみのみぞ迫まり來る

お鶴と共に
夕日かくれぬ鳥啼きぬ
今日も空しく過ぎて行く
鳥は寢ぐらに歸れども
我等は寢ねん宿もなし

お絹『さー鶴ちやん行きませうふ』
（と立ち上り、二人は次の巡禮唄を唄ひながら、そろ〳〵と歩んで退場する）

巡禮唄
深山路や
ひばら松原

巡禮唄

分け行けば
槙尾寺に
駒ぞ勇める

（附言）巡禮唄を誰様かに教へて戴いて、上手に唄つて下さい

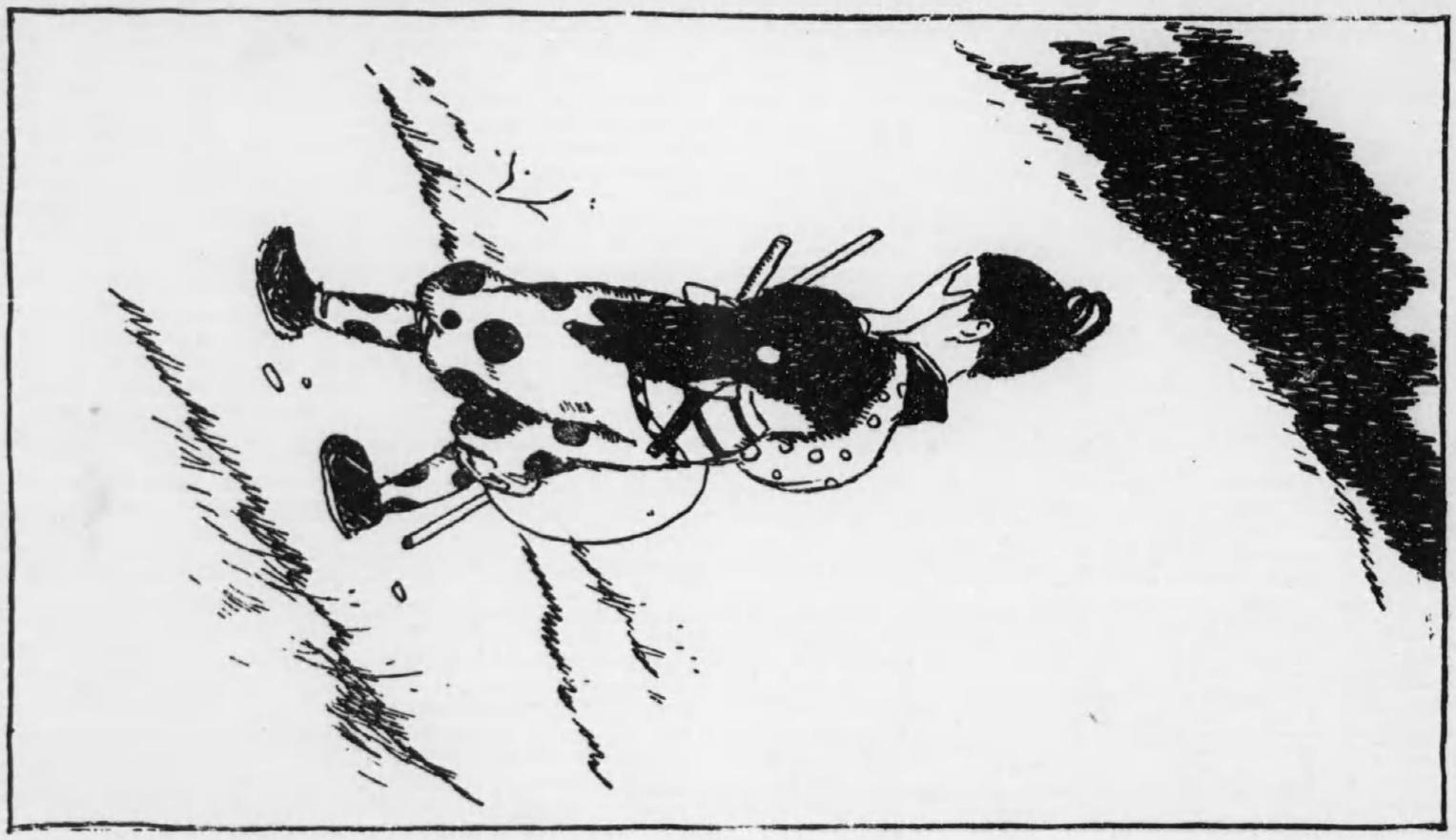
―幕―

琵琶劇 石童丸

（たつた二人切りのお芝居ですから、餘程練習を積んで、呼吸がぴつたり合ふ事と、琵琶の上手な方とが必要です）

一場

登場人物	
苅萱道心	
石童丸	



（舞臺）　高野山無明の橋に近き所にて、左手の端に墓石を二つ三つ立てゝ欲しい、
幕の開く前に、先づ琵琶の彈奏ないたします

琵　吾〳〵　月にむら雲花に風　心のままにならぬこそ
浮世に住めるならひなれ　ここに筑紫の守護職の
加藤左衛門重氏は　無情を感じ世をすてて
諸國修行に出で給ふ　殘されたりし妻や子は
思ひまつこと十餘年　父上高野にありと聞き
石童丸は母上と　菅の小笠をかたむけて
旅のつかれも厭ひなく　やうやく高野の學文路宿
明日は逢はんと喜べど　女人禁制の山なれば
母を麓に殘しおき　石童丸はただ一人

杖を力にたど〳〵と。

此處迄彈奏して來た時に、幕はさら〳〵と開かれます、そして琵琶は引き續き進みます

心細道ふみわけて
手を合はせつつ伏し拜み
峯の藥師や瀧不動　笠の屏風に肱枕
其夜はそこに假寢して　鐘の音いとも身にしみて
諸行無常と告げ渡る　峯谷々の阿彌陀佛
九百九十の寺々や　父ぞと思ふ人もなく
菩薩を念じたづぬれど　麓の母を案ずれば
三日二夜ははや過ぎぬ　松吹く風の音までも
後にひかるる心地して
母の聲かと疑はる

ほろ〳〵と鳴く山鳥の聲聞けば
父かと思ふ母かとぞ思ふ
行基菩薩の詠まれたる　歌の心の思はれて
歩むともなく歩まれつ　無明の橋にさしかかる

（附言）舞臺が廣ければ、「歩むともなく」位から登場しますが、小さい舞臺でしたら、此處まで歌ひ終つた時、苅萱道心は左手に花を入れた小さい花桶を持ち、右手に珠數をつまぐりながら、少し俯向き加減にして、靜かに登場

同時に石童丸は杖に萱笠を持ち添へ、勞れた足取で右手から登場す

（中央二三歩の間をおいて、二人はばたと行き合ひ、顏を見合はせます、苅萱は石童丸の顏を見、又腰に差したる腰差を見、少しく頭を傾け審る體ながら、又石童は輕くお辭儀をし、二人は行き交ひ、苅萱は右手に、石童は左手に廻はる）

石童（ふと振り返へり）『お坊樣暫時お待ち下されませ』

苅萱（向き直ほり）『若御、何か御用か』

石童『卒爾ながら一寸物お尋ね申しまする』

苅萱『何事ぢや』

石童『御坊様、若しや九州から世を遁れて、此山に參りて居りまする、俗名加藤重氏と申す者を、御聞き及びでは御座りますまいか』

苅萱『何に、加藤重氏と申さるゝか』

石童『はい、しさい有つて尋ねる者で御座りまする、お耳寄りに御座いますれば御敎へ下さりませ』

苅萱『加藤重氏を仔細あつて尋ねる者と申さるゝか（と驚きたる風にて、石童をまじ〳〵と見）ふむ加藤重氏を』

石童『御知り合はせの御樣子、何卒御敎へ下さいませ、哀れと思召さば、語つて

下さいませ、お坊樣は人を助けるのがお役目だと承つて居りまする』

（と苅萱の顏を差し覗くと、苅萱は顏をそらせ）

苅萱『いゝや、何に知つてゐると云ふ譯では無いが、聞き及んだ樣な名前ぢやによつて、うつかり驚きましたのぢや、――してそなたは一體誰樣かな』

石童（悲しき訓子にて）『はい、よくお尋ね下さいました、私の父は筑前博多の守護職で加藤重氏と申す者でありましたが、十五年の昔其父は譯有つて、家を出でました限り、今に行方知れず（石童は涙を呑み、鼻をすゝろ、苅萱は上を抑いでじつと眼をつぶる）其後私は播州に產れましたので御座いますが、父上の御顏を知りませず、今生でたつた一眼なりと逢ひたいばかりに、母千里と共に播州を出で、あちらに尋ね、此方に尋ね、隨分と難澁をいたしました（と又すゝり泣く）朝な夕なの雨露を凌ぎ旅から旅を重ねまする中に、ふと此高野に

在すと聞きまして、喜び勇んで麓迄參りましたが、悲しい事には女の母は登られず、私一人が日毎に夜毎に此山に登つては、探し求めてゐるので御座ゐますが、今だにそれらしい御方にも逢ひませぬ、それにたつた一人の母上は、もう遠うから病の床に伏してゐられます、何時になつたら父に會へます事やら、あれを思ひ、此れを思へば、中々に心細い身の上で御座います、お察し下さいませ』

（と地に泣き伏す、苅萱は靜に眼を開き、そろ〳〵と頭を下げて石童を見、悲しさに堪えぬ面持、花桶を置いてそつと涙を拭く）

苅萱（石童を抱き起して）『哀れな身の上、不憫な者ぢやのー』

石童（苅萱の顏を仰ぎ見て）『お上人樣、貴下の御眼に御涙が見えまする、若しや貴下が御父上では』

（と腰に縋り付くのを、苅萱は抱きしめ、右手で石童の顏を上げて、其顏をまじ〳〵と見入る、）

石童『お父上、お父上で御座いませう、左樣に思はれてなりませぬ、たつた一言でよろしう御座います、「私は父ぢや」と仰有つて下さいませ（苅萱は靜に頭を横に振る）お父上で御座いませう、耳の傍でなと、低い聲で仰有つて下さいませ』

（苅萱は兩手で石童を抱き、顏をそむけて仕舞つたが、頓て淋しく笑ひ）

苅萱『若御、私は決してその加藤重氏ではない、只の佛者だ、併し若御の哀れな物語に思はず泣かされました、尙ほ其上に氣の毒な事だが、加藤と云はれる其人は、今から恰度七日前に、此世を去られましたぞ』

石童『えー、あの父上は、それではもう此世には』

（と苅萱に縋つて泣く）

菊萱『盛者必滅會者定離は人間の約束じや、諦めて歸り母を慰めて國に伴なうが若御の務じやぞ』

石童(顔を上げ)『致方は有りませぬ、では、せめて其の御墓になと、逢ひ度う御座います』

菊萱『尤もな願じや、はて何處やらに(と見廻はし、左手の方の墓を見付け)おゝあれじやく、あれが加藤氏の御墓じや』

石童(其墓に駈けて行き、べったりと座り)『あゝ御父上、悲しう御座います、悲しう御座います、はるゝと尋ねて參れば、早や此の御姿、お父上夢になと現はれてお逢ひ下さいませ、會ひ度う御座います』

(と伏す、菊萱は又空を仰ぎ、じっと眼を閉ぢる)

琵琶

歎き悲しむ石童の　いたいけもなき其姿

見るに兼ねたる菊萱は　心行く迄抱き寄せ
父ぞと名乗り聞かせんと　はやりはすれど夢の世の
假の縁に引かされて　佛の道を踏み迷ふ
其心根こそあさましと　思ひ返してやみがたき
情を殺す菊萱の　心の中こそ哀れなり

(石童は墓前から立つて、菅笠や杖を持ち添へ、菊萱に厚く禮をする)

石童『御上人樣、色々有難う御座いました、此事を麓の母に申聞かせ、共に國へ立ち歸りませう』

菊萱『もう行きやるか、途に氣を付けて怪我いたさぬ樣に、いたせよ、母の許に行けば慰め申せ、涙は亡き父への供養とはならぬぞ』

石童『有難き御心ざし、心得まして御座います、ではお坊樣も御機嫌よう』

石童丸
（と右手に行きかける）
苅萱『待て、待ちやれ』
石童（振り返へり）『何事に御座います』
苅萱（その顔をまじ〳〵と見たる後）『もうよい、〳〵、氣を附けて行きやれよ』
石童（べったりと地上に座り、手を突き苅萱を仰ぎ見て）『お上人様、御別れ申しまする』
と震えた聲で、悲しく云ひ、二人じっと顔見合はせたる所にて、靜に幕。

――幕――

（附言）始めから終まで、しんみりと演じなければ、氣分が出ませぬ。又服裝等もなるべく、念を入れて、手甲や脚袴を忘れぬ樣。又苅萱は女學校の上級生の方ならいゝと思ひますが、此場合には、頭から白布を冠って、肩に流す事を忘れぬ樣、全て苅萱道心らしく、又石童丸らしくして欲しいと思ひます、此の劇だけは殊に御注文いたします。

正劇

夕の祈

登場人名	一場
ホッセ	農村の青年
リリアン	其の妹
カイロ	村の若者
ローゼ	村の娘

（舞臺）歐洲の或る田舍の田園

いとも靜な曲にて幕開けば、青年ポッセと妹のリリアンの二人が、貧しい仕事服に破れた靴を着け、手に鋤を持って、立ってゐる

ポッセ『なー、リリアン、もうそろ〳〵日も西に傾いた、今日の務も無事に終つたのだ、一息しやうではないか』

リリアン『え、兄さん、あれ御覽（と一方の空を指し）お日樣も一日の御用を終つて今地上の人々に「お寢み」と云ふ樣に、紅く紅く照り映えてゐるわね』

（ポッセは藁の束を二つ持って來て、下に敷き、一つに自分が腰を下ろす）

ポッセ『可愛い〳〵リリアン、腰を下しなさい、そうして暫らく暮れて行く空を見やうね』

（リリアンは無言で藁束に腰を下ろす）

夕の祈

リリアン（暫時の沈默の後）『ねー兄さん』

ホッセ『何だい？』

リリアン『あたし時々思へば、何んだか恁うして田舍に居て、田圃ばかりして暮す事が馬鹿々々しい樣にね、兄さんはそんな事ちつとも思はない？』

ホッセ『うん、僕だつて、時々そんな氣がするよ、敎主樣は人間の務に高下はないい、只正しい途を歩む人が一番いゝのだと仰有るけれど、やつぱり街に出て、いゝ暮しもしたいし、もつといゝ仕事もしたいね』

リリアン『本當にそうね、妾何んだか街は妾達の行くのを待つてゐて「幸福にしてやらう、幸福にしてやらう」と云つてゐる樣な氣がしますわ』

ホッセ『そうかい、同じだねー、考へて見れば馬鹿々々しい話さ、僕と同じやうにして學校へ行つてた、あのダルセ君は、聞けば此頃では立派な外交官に

なつて、いゝ內に住ひ、出るにも入るにも馬車だとの事だ、同じ人間であるりながら、僕は此んなにして土ほじりだらう、考へて見れば馬鹿々々しくなるね』

リリアン『そうよ、それにあのローゼさんね、あの方は今では美しい女優になつて街では大評判ですつてね』

ホッセ『そうかい、お前も街に出て見たいだらう、僕も行き度い、どうだ一層の事、此の村と此の鋤とを捨てゝ、街に出樣か』

リリアン（うれしそうに）『それがいゝわ、妾も前からそんな事を考へてはゐたのですが、兄さんに云つたら、きつと叱られるだらうと思つて、遠慮してたのよ街に行けばきつとよい生活が出來るわ』

ホッセ『そうだらうなー、ぢやー明日にでも此の田圃をあのカイロ君のお父さん

にでも賣つて、其お金で行かうかね』

リリアン『えー、妾何だか嬉しいわ、早や街に來てる樣な氣がしてよ』

（と云ふ時歌歌ふ聲がするに、二人は口を噤みて、耳を傾けろ、と若者カイロが、破れこけた服を着け、跛のまゝ、さも疲れたらしく力無い足取りで、次の讃美歌を歌ひながら登場し、片方に立ち止まり、終迄歌ひ續ける）

カイロ獨唱〜思ひ出るも　恥しや
父のみ許を　離れ來て
跡無き夢の　跡を追ひ
空しき幸を　樂しみぬ。
習はぬ業の　牧場守り
草のいほりの　起き伏しに

人の情の　薄衣
憂世の風ぞ　身にはしむ。
破れし袂に　おく露も
父の惠を　忍ばせて
無明の暗も　明けにけり
いざ故郷へ　歸りゆかん。

ホッセ『その聲はカイロ君ではあるまいか』

カイロ（驚いてふと此方を見）『おー君はホッセ君、恥しい此の僕の風を見て呉れ給へ』

ホッセ『それは又どうした事だ、恰度今から二年前に、君がお父さんから澤山の金を貰つて、街に行つたと云ふ事は知つてゐたが、大方街で勉强をしてきつと、いゝ暮しをしてゐるとばかり思つてゐたに』

カイロ（力無げに）『そうだ、二年前に僕は澤山の分け目を貰つて街に行つたのだつた、街に出ると色々な美しいものがある、その美しいもの、心を喜ばす樣なものは、僕の心をすつかり變へて仕舞つた、僕は自分を忘れて、その美しいもの、眼を喜ばすもの、口を喜ばすものを追ひ求めたのだつた。併しそれは、幻の樣なものだつた、少しも手には殘らなかつた、殘つたものは貧棒と病弱な體だけだつたのだ（話してゐる中にホツセやリリアンの顏は暗くなり、打ち沈んで聞いてゐる）それから無一文になつた僕は、其弱り果てた體を引きずつて、食を求めねばならなくなつた、工場に行つて鐵槌を持つた、牧場の羊牧者になつて、納家の中で寢た、羊の食ふ樣なものを、食つて生命を保たねばならなかつた、それに就けて始めて夢は醒め、故郷の父の慈愛が身につまされて有難くなつたのだ、たつた一眼でも逢ひたいと云ふ心

で一杯になつたのだ、だが此んなになつて歸つて來たのだから、もうお父さんとはよう云はないが、せめて僕になりと、使つて貰つて、お父さんに孝行し度いと思つて、此うして歸つて來たのだ』

ホツセ（ホーと溜息をつき）『君、カイロ君、それは定めし辛かつたであらうなー』

（と手を握る）

カイロ『だがね君、父は僕の樣な不孝息子に會つて吳れるだらうかね』

ホツセ『君親と云ふものは有難いものだよ、君が國を出てからと云ふものは、君のお父さんは僕の顏を見る毎に、涙を流して君はどうしてゐるだらふ、病氣にはなつてはゐまいか等と云つて案じてゐたよ（カイロは泣く）だから、悔悟した君が歸つたなら、きつとお父さんは兩腕を擴げて、君を迎へて吳れるだらふよ』

カイロ『そうかね、そんなに云つて呉れてゐたか、有難いものだね、本當に世の中に親の慈愛程變らない、欺りの無いものはないねー、僕は此れから行つてお詫をしやふ』

ホッセ『それがいゝ、きつと君の家は喜びに滿たされるだらふよ、早く歸り給へ』

（と一遍手を握り振つて、カイロは別れて行く、後にホッセは元の藁束に腰を下し、暫時物思ひに沈む）

ホッセ『ねー、リリアン私達はもつと考へなければいけないね』

リリアン『兄さん、そうね本當に』

（此時ローゼが次の歌を歌ひながら登場し、片方に立ち留つて歌ひ續ける、ローゼは非常に美しい女優の風體をしてゐる）

ローゼ獨唱〜〜綺羅をあざむく　錦の衣に

憂を包むと　誰ぞや知る
玉の杯美酒に
涙宿ると誰ぞや知る。
慕ひ求めし歡樂の
覺めて儚なきダ月に
思ひは遠き故郷の
母の腕の白き色。
あな懷しの故郷よ
野邊の草葉に小川の水に
空行く雲に山の端に
慈愛の涙宿り見ゆ。

リリアン（延び上り、立つて行き）『あのー貴女はローゼさんぢやーなくつて？』

ローゼ『あ、まー貴女はリリアンさんでしたのね（と手をとり）まー兄さんと御一緒にお仕事なの、羨しいわね』

リリアン『え、羨ましいつて？、變な事を仰有るローゼさんだ事、貴女こそ、そんなに美しくなつてゐらつしやつて、妾本當に羨ましいわ』

ローゼ『貴女のお眼にも、そんなに見えるの？』

リリアン『でもそうぢやーなくつて？』

ローゼ『いーえ違ひます、違ひます、貴女は間違つてゐらつしやる、では御話しませふね、妾は此度愈々國に歸る事に決めたのよ、永い間欲しいと思ふものは何でも、身に着けました、だけど滿足は決して得られませぬでした、欲しいと思ふものは何でも食べました。併し滿足は決して得られませぬでした、色々な欲しいと思ふ暮しは、どんな事でもして來ました、だけど滿足は其處にもありませぬでした。妾は女優になつて、出來るだけの名聲を得る事が出來ました、併しそれは本當につまらないものなのでした。そして妾は滿足を滿足をと一生懸命に追ひ求めましたが、行けば行く程滿足は妾から遠ざかります、そしてとう〳〵妾は疲れて仕舞ひました、妾の體はもう色々な汚れに染んでゐます、泣いてもわめいても取り返しはつきませぬ。ですから貴女の汚れない清い御身が羨しいので御座いますよ』

リリアン『まー、そうなの』

ローゼ『疲れ果てた體を運んで妾は、故郷へ歸つて參りました、そうしても一度體の汚れを洗ひ落して、村の娘になり度いと希つてゐます』

リリアン『ではもう都へは行かないの？』

ローゼ『決して參りますまい、此んな美しい所は何處にもありませぬでしたよ。では又明日にでも、お日にかゝりませふね、早くお母さんに逢ひ度いから失禮いたします』

（と行きかける）

ホッセ『あ、ローゼさん一寸待つて下さい、そう云ふのは貴女だけでは無いのですか？』

ローゼ（振り返へり）『えー男でも女でも、そして世の中から出世をしてゐると思はれてゐる人でも、餘り幸福らしくは有りませぬよ、此の村の人達の如にはねー、左樣なら』

（ローゼ退場、二人は後見送つて、暫時深い思に沈む）

ホッセ（顏を上げて）『ねーリリアン、可愛いリリアン』

リリアン『なーに』

ホッセ『私達が街に行く事は止そうね』

リリアン『止しませふね、やつぱり此村がよいのですね』

ホッセ『さ、大分暗くなつた、二人で何時もの樣に讃美歌を歌つて、御祈りをしませふ』

二人合唱〜〜わづらはしき世を
　しばしのがれて
たそがれ靜に　共に祈らん。
うけし御惠を
　思ひ續けて
いよゝ行末の　幸を希はん。

うれいもなやみも
父の御神に
ゆだねまつるこそ　喜びなれ。
身にしみ渡る
この夕の
えらぬけしきを　いかで忘れん

（歌ひ終ると、二人は中央に向い合つて立ち、手を胸に合はせて首うなだれ、靜に默禱を捧げる、此間も靜寂なる樂を奏す）

――幕――

（附記）此幕の間に、段々と電燈をしぼり暗くして、祈の時には、ほんのりと二人の姿が見ゆる位の明るさにする事が出來れば、最もよろしい）

情緒劇　父歸る

（此の對話劇は上演の前に、特に充分練習して、しこなしや聲や顏の表情で、時折の感情をしんみりと出して欲しい）

一

登場人物

父	太平
母	きぬ
娘	小夜子
村の娘	甲
同	乙
同	丙

（舞臺）　海岸の波打ぎはで、一二本松の木があり、向ふに一つ島でも見ゆれば結構です。
靜な曲の後幕が開くと、小夜子は右手の方にうなだれて立ち、左手の方に村の娘甲乙丙の三人が群がつて、立つてゐる。

村の娘甲『だつても、そうじやーないの、小夜さんにはお父さんが無いわ、だから貧棒で、學校にも行けないのよ』

同乙『妾は貧棒な子が大嫌い、着物は汚ないし、髪は鳥の巣の樣だし』

同丙『顏は汚れてゐるし、下駄も無いし』

小夜子（泣き出しそうな顏にて）『そんな事を言はないで、遊んで頂戴な、　妾淋しいんですもの』

娘甲（憎々しく）『いやよ』

同乙『あたいもいやよ』

父歸る

同丙『あたしだつていやよ』

（堪え切れぬ涙が、込み上げて來て、小夜子は袖を顔に當てゝ泣き出す。三人は顔見合はせ指して笑ふ、此時母親きぬ魚籠を持つて登場）

きぬ（小夜子に走り寄り、抱いて）『おやお前小夜ぢやーないの、どうしたの、何が悲しいの？』

小夜子『母さん、妾悲しい、妾悲しい、だつて内にはお父さんが無いのですもの』

きぬ『あ、又父さんの事を御云ひかへ、もうそんな事を思ふものではありませぬよ。さあ涙を拭いて』

（と拭ふてやり、ふと三人の村の娘を見る）

きぬ『あ、嬢さん達、あの此の子は父の無い可哀そうな子ですからね、決して酷めたりなんかして下さいますな、不幸な子は憐れんで慰めてやるのが、私

達人間の務めですよ』

姫甲（乙、丙の顔見合はせ）『ねー、何んだかつまらなくなつて來たわ歸りませうか』

同乙『そうね、行つて妾のとこで遊びませふよ』

同丙『それがいゝわ、もう日が暮れて、少し寒くなつて來たわ』

（語らひながら三人は退場します）

きぬ『小夜ちやん、もう泣くのじやーないよ、いゝ子だからね、父さんは居なくつても、母さんが二倍も三倍も可愛がつて上げてるのじやーなくつて』

小夜子『えー、母さん濟みません、もう泣かないから安心して頂戴ね、でもねー母さん、お父さんは何時歸るの？、妾矢張り逢いたいわ』

きぬ『何時だかそれが分らないのよ、若し神樣が御許し下されば、又逢へるでしやうがね——お前も知つてる通り、父さんは六年前お前が未だ二つの時に

父歸る

漁に出て、その夜の怖ろしい嵐は父さんを……』

小夜子『何處かへさらつて行つて仕舞つたのね。母さん何故神樣は妾達を此んな目にお遭はせなさるのでしやう』

きぬ『もういゝ、もういゝ神樣には深い思召しが有るのです、そして今でも妾達母子を、涙ぐましいお目で、じつと御覽になつてゐられるに違ひないのよ』

小夜子『そうだつたら、きつと何時か逢はせて下さるでしやう、妾そう思ふは』

きぬ『そうです、きつと父さんは歸つてお居でゞしやう、でもね小夜ちやん、お前はなるべく父さんの事は忘れた方がいゝよ、若し父さんはもう生きてゐられない樣な事が有つたら、神樣をお恨みする樣になるでしやうからね』

小夜子『では、お父さんはもう死んじやつたの』

（と母の顏を見上げて、悲しく言ふ。母は子を抱き）

きぬ『いえ、いえ、そうだと決して決まつてはゐないの、多分歸られるでしやう——さあ母さんと一緒にお歸り、何か暖いものを作つて上げるわ』

小夜子『え、でも妾もう少し此うして海を見てゐたいのよ』

きぬ『そうかい、では直ぐに後からお歸りよ、遲くなると風を引くよ、御馳走の出來る時分には、きつと歸つてお出でよ』

小夜子『あ、いよわ』

（きぬは退場する、其後にて、小夜子は岩に腰を掛け、海の方へ向き、暮れ行く海面をじつと見詰める）

小夜子『此うして、毎日〳〵此處で待つてゐるのに、遂々父さんは海から歸つて來ないの、今日もお歸りにならないで暮れて仕舞つた。何時になつたら、逢へるのだらふな』

父歸る

父歸る

（と獨言して、又海を見詰めてゐると、何處かゝら歌が聽こえて來る）

歌〳〵あたしの父さん　何處へ行た
　あたしの父さん　何時かへる
いつも泣き泣き聞くけれど
　岩にとまつた　白い鳥
何も云はずに　飛んで行き
　あたしの涙に　日は暮れて
　遠くの舟に灯がともる。

（此歌を小夜子が唄ふ）

（悲しそうな曲で此歌が唄ひ終られると、も一度同じ曲の奏樂だけが繰り返へされる、そしてそれの終つた頃左手から、長々の餓に疲れ果てた父親太平が、よぼ〳〵と歩んで出て、左の方に腰を下して、同じく海を見てゐる）

（もふし）

太平（暫時の後顔を擡げて小夜子を見）『ねー娘さん、今日もとう〳〵暮れましたな』

小夜子『えー、何時の間にか暮れて仕舞ひましたわね、（獨言のやうに）あー今日もやつぱり駄目だつた』

太平『可愛い〻娘さん、駄目つて何が駄目ですの』

小夜子『妾こうして毎日、父さんの歸りを待つてゐるのよ』

太平『父さんつて何處へ行つてるの？』

小夜子（悲しそうに溜息をつき）『それがね、ちつとも分らないの、一層すつかりお話しませうか、それは〳〵可哀そうなのよ、小父さんきつと同情するわ』

太平『えー聞かせて下さい、此小父さんにも悲しい話があるのですから後で話しませうね』

小夜子『あたしの父さんはねー、或晩いつもの樣に母さんに送られて漁に出たの

父歸る。

父歸る

處がね其晩恐ろしい嵐が起つて、海も岡もその中へ捲きこまれてしまつたのでした』

太平『そんな恐ろしい嵐が時々ありますね』

小夜子『そして翌る朝、母さんは狂氣の樣になつて、海邊を走り廻つたのでしたが、父さんは歸らないで、其代はりに、父さんの舟の破片が流れて來ました、母さんは泣いて泣いて、泣き通したのでしたが、父さんは歸つては來ませぬでした』

太平『可哀そうになー、世の中にはよう似た話もあるものだなー』

小夜子『それでも母さんはねー、父さんがいつ歸つて來るかも知れないと思つてね、毎日お飯だつてよそつて、並べて置いたり、晩には毎晩遲くまで灯をつけて窓の際に置いて、目印にして居たのでしたが、そのお飯も灯も無

駄になつて仕舞ひました』

太平『……』（兩手で顏を覆つて、忍び泣きしてゐる）

小夜子『それでも今だつて、やつぱりそうして待つてゐるのよ、でもね、お父さんは何處かに生きてゐて、何時か歸つて來るかも知れぬとでも思つてゐなければ、母さんだつて生きてゐられないからだと、何時か云つてたわ』

太平『そりやー尤もだ、尤もだ、そして娘さんお前さんもその父さんに逢いたいでしやうね』

小夜子『そりやー逢ひたいわ、だからつい歸つて來るかと思つて、毎日々々此處に來て、待つてゐるのだけど、ちつとも歸つて來ないわ、小叔さん父さんは何處へ行つたのでしやうね？』

（と小夜子は太平に近付いて、其顏を見上げる）

父歸る

太平『娘さん、そのお父さんと云ふのは、どんな人だね』

小夜子『妾知らないの、でもあたしが二つか三つの時だつたのですもの。だけど母さんは何時もあたしを膝に抱いて、よく父さんの事を話して呉れるわ、眷の高い色の黒いそして心切な人ですつて、そしてね、そんな話をする時には母さんはきつと泣いてるのよ』

太平(少しせきこんで)『娘さん二つ三つの時つて、今幾つなの』

小夜子『あたし?八つよ』

(太平は指を一本一本折つて、年を繰つて見る)

太平(益々せきこんで)『では五年前ですね、娘さん、母さんの名は何て云ふの、可愛いお前さんの名は何と云ふの?』

小夜子『母さんはおきぬさんと云ふの、そしてあたしの名は小夜子よ』

太平(驚いて)『え、きぬ、そして小夜子?』

(と叫んだまゝ、元の所にべつたりと坐つて、激しく泣く)

小夜子(涙聲になつて)『小父さん、小父さんはあたしの父さんを知つてるの?、小父さん教へて頂戴、ね小父さんあたしの父さんは何處に居るの?、小父さん、小父さん、何故泣くの?』

(小夜子は太平の手を握つて搖り動かす)

太平(急に體を起して小夜子を抱き)『娘さん、その父さんは私ですよ』

小夜子(驚きと喜びとに飛び上つて縋り付き)『え、父さんなの、父さんなの、あたしの父さんなの、あー父さん』

(二人は抱き合つて、泣く)

歌〳〵長い長い　其間

父歸る

父歸る

夜毎の窓に　灯を
ともして待つた　父さんは
流れてついた　離れ島
のがれて海越え　山を越え
やうやく歸つた　濱の家
あすの晩から　灯は
窓の際には置かれずに
三人の中にかこまれて
あか〳〵と照るであろう。

此歌が影に唄はれてゐる間に靜に

幕

お伽劇

魔法鏡

二場

登場人物

少年サブライム
乞食實は神樣
國王ヘンリイ
后リリアン
善臣マーシャル
惡臣ゼーリス、
モーリスの腹臣ジップ
侍女二三名
肯從二三名

第一場

（舞臺）ギリシヤの或る城下はづれ、背景か用ふるならば、並樹の遠くにギリシヤ風の農家等見ゆればよろしい。

奏樂の中に幕開けば、后リリアン初め侍女居並びて居る

侍女甲『お后樣には、今日殊の外御機嫌麗はしく拜し上げ』

侍女一同『お目出度く存じまする』（と頭を下げる）

后『皆の者にも、今日の供大儀であらうのう』

侍女一同『勿體無う存じます』

后『時に皆の者。領内の者共は妾をどんなに噂してゐるか、知り度いものだが誰か耳にはせぬか』

侍女乙『御領内の若きも老いたるも、皆々お后様の御徳をたゝえて居ります』

同丙『男も女もお后様の御慈愛を喜び申して居りまする』

后『左様か、して王と妾とどちらを尊しといたしてゐるや』

侍女一同(顔見合はせ、やがて)『むしろお后様に心傾いて居りまする様存じまする』

后『左様か、そう無くてはかなはぬ事ぢや』

(と満足そうに見える、其時左手の方から、悪臣モーリス登場)

モーリス『お后様、此方で御座いましたか』(と禮をする)

后『おゝ、モーリス何か急用でも有つて、參つたか』

モーリス『少々御耳に入れ度き事が御座りまして』

后『遠慮無う云ふて見や』

モーリス(侍女達を見て)『他聞をはゞかりますれば』

后『これ侍女共、そなた達は暫し遠慮しや』

侍女一同『かしこまりました』(と退場)

后『此處にはそなたと妾と二人切りぢや、遠慮なく云ふて見や』

モーリス(少しくにじり寄り)『外の事では御座いませぬ、お后様の御差圖に依りまして、王様の御命を(と云つて一寸あたりを見廻はし聲を低めて)お狙ひ申しましたが、あの忠義者のマーシャルが附いて居りまして、一方ならぬ邪魔をいたします』

后『困つた奴ぢやの』

モーリス『眞に左様で御座います、で先づ第一にマーシャルから先に遠ざけませぬと、手の下し様も御座いませぬ』

后『で、どういたすと云ふのぢや』

モーリス『恐れながら王様は、お后様を最も信頼なさつてゐられますから、此處は一つお后様の御力を借り度いものと存じて居ります』

后『力を借りるとは、何といたすのぢや』

モーリス『王様へ お后様御直々に、マーシャルを讒訴遊ばせさすれば、王様は自らあの忠義者を遠ざけて、お仕舞ひになるだらうと存ぜられます』

后『いゝ所へ氣が附きやつた、城へ歸れればそういたそう、モーリス、若し妾の天下になつたならば思ふ存分禮をして取らすぞよ』

モーリス『何分共に、よろしく御願ひ申します』

后『皆の者、妾は歸館いたすぞよ』

（侍女登場）

侍女甲『御歸館に御座りまするか』

侍女乙『御供仕りまする』

侍女一同『お后様には、御機嫌麗はしふ御立ち遊ばしませ』

（一同の敬禮の中に、后は立上り、靜々と歩んで左手に退場し、侍女やモーリスも續いて入る暫らく奏樂が聞こえ、右手より少年サブライムが、長の旅の裝ひにて、さも疲れたらしく、とぼ〳〵として登場する）

サブライム『あゝ日も段々と西に傾いた、今夜も又空しく野邊の宿りか、胸に抱いた此志は、何時酬いられる事だらうかな』

（サブライムは程よき所に腰を下す、其時左手の方から、汚らしい乞食登場し、其横に座る）

乞食『旅の御方様、もう長らく食にはなれてゐる、乞食で御座います、一片のパンでも御恵み下さいませ、もう倒れて了ひそうです、どうか哀れと思召し

て』

サプライム（乞食を見て）『何にパンを呉れいと云ふのか、俺も同じ様に餓てゐる、そして此處には最後の一片のパンがある、此れは俺の生命に、大事な大事なものなのだ』

乞食、然し、どうかそれを下さいませ、私はもう、一分間も生きては居られそうにありませぬ、もう靈は此う體から離れて行く樣に思はれます』

サプライム『餘程の事であるらしい、よろしい上げやう、ぬ兄弟お前さんは私しよりも餘計に餓てゐるらしい（腰の袋から一片のパンを取り出し）さあー是れを上げやう』

乞食（氣の毒そうにサプライムを見て）『さうですか、有難う御座います、だが旅の方、貴下もお見かけ申せば』

サプライム『うん、一日中歩いて隨分と腹は減つてゐる、だが此パンを食つてそれを凌いだ所で、もう明日のパンは無い、もう此上は神樣にお任せするより外無い事だ、お前さんは年寄りだから、我慢も出來まい、さーさ遠慮せずにお食べなさい』

乞食『そうですか、貴下の生命をすゝる樣な此パンですが、私はもう心棒が出來ませぬから、では戴きます（と二口三口食べ）あー美味い、枯れかゝつた草に水をかけた樣だ、生命が躍り出した——時に旅の御方、貴下樣は何故の此旅ですか』

サプライム『わしかい、私は政事にたづさはつて、人民達に善い政事をして遣り度い望みなのだ、そして何處かで用ひられたいと、恁うして旅に旅を重ねてゐるのだが、神樣が御許し下さらないのか、もうそれも駄目らしい』

乞食『それは立派な御志望です、何時かきつと叶へられる事で御座いませう（食つて了ひ）あーどうも御馳走様でした、私はよみがへつた様な氣がします、それに引き代へ、貴下は段々と弱つて行きます、顔は蒼くなつて行きます』

サブライム（空腹の爲に力盡き果て苦しそうに）『あーあー、もう私は神様に召されて行く』

（と倒れて仕舞ふ、乞食は前とはすつかり様子が異い、きちやんと立ち上がり、倒れたサブライムを、じつと見下ろす時、急に電燈が消えて、暗くなる、そして暫時の後舞臺に一條の光が差すと、其處に神々しい白衣の神様が現はれ、サブライムは以前の所に倒れてゐる）

神様『これサブライム、サブライム』

（と呼ぶ聲に、サブライムはむつくと起き、神様を見て平伏す）

サブライム『あ神様、お召しで御座いますか』

神様『そなたの信心と、心切とは世に類少ないものである、そなたは諸の試練に堪え、よく信心と愛とを全うした、只今愈々そなたの志望を叶へて遣らう（と云つて、手に持つた小さい鏡を差し出す）サブライム、之を受けよ、是れは魔法鏡と申して、人の本性が映るものである、欺ない人の本心があり〳〵と映る世にも不思議なる鏡であるぞ、是れを持ち王城に行くべし、其處に汝の進むべき路は開かれるであらう』

（サブライムは、手を差し延べて其れを受け取る）

神様『さらばサブライム、汝には常に我が附いて守つてとらするであらう、王城に行く事を怖るゝ事なかれ、さらば〳〵』

（再度暗黑になり、其間に神様は退場し、直ぐ元の如く明るくなると、サブライムは手に鏡を持ち初めの通りに倒れてゐる）

サブライム（ふと眼を覺まし）『はて不思議（と起き上がり、あたりを見廻はす）さては今のは夢

であつたか、あの有難い神樣の御姿は尙ほ眼にありくと、浮んで見ゆるに（とふと手の鏡を見て驚く）あ、此鏡、今夢の中に戴いた鏡は正しく是れださては今のは夢ならぬ神樣の御示現であつたのだ。（鏡を押し頂き）神樣、神樣、有難う御座います』

と伏し拜む時、急に奉樂起こり、其中に靜に

——幕——

第二場

（舞臺）王宮內右手の方に王座がある、正面の背景に庭園を見せ、其間に廊下らしく欄干等見せて、其左右から出入し廊下を傳つて來る如く思はせれば、一層よろし。

幕開けば、中央に惡臣モーリスと善臣マーシャルとは、向き合つて椅子に着いてゐる

モーリス『それはマーシャル君の言葉とも思へない、此んなに恥を受けて居ながら

此儘泣き寢入に濟ます事は、我國及我王樣の恥である、是れはどうしても早速開戰して、隣國に我の力量を見せて遣らねばなりませぬ』

マーシャル『併しそれは淺墓な考へ方だ、戰を開かねばならぬ程の事でもないに輕々しく兵を動かす事は、それこそ國の恥である、物笑ひの種になる、それに戰と云ふものは、御存じの通り澤山の人民を殺ろし、愛する者に別れさせ、家を壞ち田畠を荒させるものだ、つまり戰爭は血と涙と飢餓とを產むものだ、輕卒なる開戰には、絕對に反對である』

モーリス『輕卒ではない、由有つての開戰だ、君が反對なれば、それでいゝ、君の樣な臆怯者はジッと家の中に引込んで、震へてゐるがいゝ、僕は劍を執つて立つであらう』

マーシャル『一人で戰爭が出來るなら、行くがいゝ、併し吾々の考へ方一つで、多

くの國民の幸不幸が別れるのだから、よく考へて後悔の無い樣にしなければいけない』

モーリス『何んだ彼んだと理屈はつくものだ、だが君の心はよう分つてゐる、表に國の爲だ王樣の爲めだ、と云つてはゐるがその實は、只に君の生命が惜しいばかりだらう』

マーシャル『失敬な事を云ふものではない、何時か此の火と燃える忠義の心を見せてやる時が有るだらう、見てゐるがいゝ』

モーリス『何を馬鹿な敗け惜しみを、はゝゝゝゝ』

（此時奥より『王樣の御出まし』と呼ぶ聲がするに、二人は椅子を片寄せ、禮をして出迎へる、其處へ右手の方から、國王ヘンリーは、侍從二三名を從へられて、登場し設けの席に就く）

マーシャル『國王には、何時も變はらせられぬ御機嫌の體』

モーリス『私等臣下にとりまして』

兩人『此上無き喜びに御座いまする』

國王『只今其方等は、何事を爭つてゐたのじや』

モーリス（一二歩進み）『はい、斯樣に御座いまする、此度の隣國の仕打ちに就きまして、私は開戰いたして王樣の御威光を見せて遣り度いと主戰論を唱へました所』

マーシャル『臣は飽く迄平和を熟望いたします所から、反對いたし只今言ひ爭つて居りました』

モーリス『只此上は一つに國王の御賢明なる御裁下を待ち上げまする』

國王『うん左樣か、（と考へられ）予はモーリスの意見も尤もとは思ふが、此度の事

に就いては、兵を動かせるには及ばぬと存ずるぞ』

モーリス『併し王様、それは恐れながら御考へ違いかと思はれます、此の國恥を忍びまする時は、我が國威は地に墜ちはいたすまいか、一時も早く兵を差し向けまして、敵國に攻め入り、あはよくば此機に乘じて、隣國を一呑みに……』

國王『何を申す、予は平和を愛する者じや、神の名に由つて、此國を治めてゐるのじや、一時の功名心に驅られて多くの人民の血を流す事は好ましくない

モーリス汝は下つて謹慎いたせ』

モーリス（驚き恐れ）『え、あの謹慎を』

國王（嚴として）『そうじや、謹慎申し付ける』

（其時奥に一暫時お待ち下さりませ』との后リリアンの聲がして、頓て、后は侍女を從

えて、右手から登場し、侍女の進める椅子に腰を下ろす）

國王『リリアンか、して待てとは何事じや』

后『はい、只今只事ならぬ事を耳にいたしまして御座います』

國王『只事ならぬ事とは？』

后『はい隣國には、近々我國に攻め寄せまする企にて、もう既にその準備も整いましたと承りました（一同さっとなる）それに又恐ろしい事には、其處に忠義顔をいたして居りまする、マーシャルは實は敵の間者で御座りますぞ』

マーシャル（驚き思はず進み寄り）『あ、お待ち下さいませ御后様、此のマーシャルは左様な淺墓な者では御座いませぬ、どうか御信じ下さいませ』

后（睨め付けて）『何を白々しく言やる、もう其證據が上がつてゐますぞ、再三ならず隣國へ内通いたして居りませうが』

マーシャル『いえ、それは何かの御間違です、私は決して、いえ決して』

（と進まんとすると、モーリスが其肩を捕へ引き戻し）

モーリス『無禮であらう、ひかへて居れ』

國王（后を顧て）『それは本當か』

后『本當かとは御情なう御座りまする、私よりマーシャルの方を御信用なされまするか』

國王『左樣か、うむそれ程に云ふなら間違は有るまい』

モーリス（未だマーシャルの肩を掴んだまゝ）『王樣此の間者奴を如何いたしませう』

國王『牢に入れ』

モーリス（腹臣のジップの方へマーシャルを押しやり）『ジップ、此奴を牢に投り込め』

（マーシャルはよろ〳〵と跟けてジップの脚下に倒れる、それをジップは荒々しく取つて押へ）

ジップ『さーマーシャル殿——いや間者奴立て、立て』

（と引き立てゝ、退場）

國王『酒を持て、酒を持て』

（侍從は入つて、直ぐに酒とコップとを持つて來る、侍女はそれを國王に手渡して、酒を酌むと王は二三杯飲む）

國王『憎くき隣國奴、今に目に物見せてやるぞ、城の上に火の雨を降らせて、燒き盡して遣るぞ』

（と獨りで、うめく樣に云ふ。其時右手の方からすか〳〵と少年サブライム登場、べつたりと座つて平伏する）

モーリス（ふと是を見、腰の刀に手をかけて）『何者だ！』

サブライム『王樣の御酒の興を助けに參りました』